
Dies irae × **I S**

ドレイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i e s i r a e × I S

【Nコード】

N 6 5 6 9 Z

【作者名】

ドレイク

【あらすじ】

この話は、IS世界のキャラをD i e s i r a eのキャラ風に人格改変したお話です。一夏が司狼っぽくなり、箒が連っぽい人格となって色々と騒動を引き起こします。

第一話

私が剣術に没頭するのは、ひとえに連綿と受け継がれてきた技術を受け継ぐことに至福を感じているからだ。満ち足りていくといつてもいい。

勿論、初めは気乗りしなかった。私は何気ない日常こそが好きだった。その気持ちを言葉にできない子供のころから、ずっと。だからこそ、そんな日常とは対極の方に位置する武道なんて、関わるだけでも嫌だと思っていた。

幼馴染の腐れ縁に言わせれば、私の思想はキチガイ以外の何物でもないらしい。故あって家族と離れ離れになってあいつの家に住むようになってからは、よくそのことで口論になったものだ。

曰く、人生は未知の刺激というスパイスがあつてこそ、そんな腑抜けた人生なんぞ死人のそれと全く変わらない。それに――。

「お前は変わらない日常を愛しているんじゃないまの、変わらないままの刹那<輝き>こそを愛してるんだよ」

などと言われたこともあった。中々どうして、人の事を見ている奴だと思つ。その言葉はするりと私の中に入って、違和感なくぴつたりと奥底に嵌まった感じがした。

「お前はありふれた日常の中にも輝きを感じて。だからこそその輝きがいつまでも続いて欲しいと思つているだけで、変化そのものを嫌っているわけじゃないだろ？」

思えば、私は子供のころから美術品を鑑賞することが好きだった。

実家が神社を営んでいる関係上、寺社仏閣の貴重物を見る機会も多くて、そういうときはいつだって時間を忘れて見入っていた物だ。

成程、確かにそう言った物は、いつまでも色褪せぬ刹那<輝き>だろう。当時の人々が、狂おしいまでの情熱をこめて作り上げるからこそ輝きを放ち、そう言った物は後世でも評価され続ける。

そんな自分の気持ちに気付けば、剣術の修練というの、なかなかどうして悪くはなかった。先人達が己の命をかけて築き、連綿と続く命で以って残し続けた刹那、思えば、そのなんと輝いていることか。

その一端に触れるというのは、体力の続く限りいつまでも没頭し続けていたいと思うほどだった。

こうして、周囲からは剣術馬鹿と称される私が出来上がったのだ。開けても暮れても剣の事ばかり考えて、洒落た服で己が身を着飾るよりも、古流剣術の術理を収めるほうに注力する。そんな時代に逆行したかのような武者の自分だが、まあ今の私自身が悪くないと思っているから良しとしておこう。

「——それにしても一夏、お前はとことん厄介事が好きだな」
「いい男には厄介事が付き物なんだよ」

そして私をそんな人物に変えた腐れ縁はというと、私と同じ教室で減らず口を叩いている。

言っておくがここは明文化されていない物の女子高みたいな場所で、男であるこいつがいられる場所ではない。

織斑一夏。染め上げた金髪に捲り上げた学生服の袖からは刺青が覗く、見紛うことなきチンピラだ。

そんな奴がここ、IS学園に何故いるかと聞かれれば答えは一つ。

コイツがISを動かしてしまったからだ。

何でも高校受験の会場にあったISを面白全部で触って見たら動かしてしまった、ということらしい。

「第一お前、女尊男卑にどっぷり染まった奴を嫌っていただろうが」

「ん？ ああまあ……それ差っぴいても面白そうじゃねえか」

「それでお前にとってしてみれば地獄の様なここに来た、と？」

「そうそう、元から選択肢なんてない様なもんだろ？ 要は気持ちの持ちようさ。自発的にここに来たってことなら精神衛生の面でもプラスだろ」

相も変わらずプラス思考だなコイツは。身に降り注ぐ厄介事全てを未知の刺激としてとらえて、面白事に変えている。

正直言つて、コイツの事は馬鹿とは思えない。出会った時から一貫してぶれないその性根は、ここまできたらいつそ見事と言えるのだろうな。

私には決して真似出来ない、そして真似したくない姿勢だと思う。騒動に塗れた日常なんて御免こうむる。

「——ちよつと、よろしいかしら？」

ああ、早くも厄介事の足音がすぐ後ろまで来ているようだ。全く、私を巻き込んでくれるなよこの馬鹿。

「聞いておりますの？」

「あれ、オレ？」

「明らかにお前に視線を向けているだろうが、よかったな、早速役得じゃないか」

「うええ、これが？」

「見た目は綺麗じゃないか」

「ばっかお前、よりどりみどりのこの状況、気にするべきは中身だろうが」

「……つまり？」

「こんな見た目からして高飛車そうな女、ちょっと引くわ」

心底嫌そうな表情を見せる一夏。まあ確かに、声をかけてきたこの女性は見た目からしてきらびやかな雰囲気を纏っている、いわゆるお嬢様という奴だろう。

「き……聞いて「ああ、私もちょっと近づきたくないタイプだな」ますのっ!!」

「いや、聞いてない」

「不本意だがこの馬鹿と同じく」

「聞いてますわよね、そんな反応返せるぐらいには耳に入っているでしょうっ!!」

「よし、では聞いてやろう。要件は何だ？」

「何でお前はそう偉そうなんだ」

「だってオレはこの学園で唯一の男子生徒だぞ？ 希少性でいえばオレが最上位にきまつてるだろ」

「馬鹿で最上位の間違いだろうが」

「お前よりはましたよ」

「それはこっちの台詞だこの馬鹿一夏」

「聞いてますのおおおおおおおおおおおおっ!!」

どうやら話しかけてきた人物は一夏のノリについてこられなかったらしい。絶叫を迸らせて肩で息をしている、御愁傷様だといっておく。

私が彼女の立場なら絶対近づきもしないだろう、実に度胸がある。

「一夏、そろそろちゃんと聞いてやれ」

「そうですね、世界唯一のISを動かせる男がどんな人物か見定めて差し上げようかと思いましたが、まさかこんなちゃんぽらんな男だったとは」

「んなもん頼んでねえよ、小さな親切大きなお世話って知ってるか？」

「んなつ！？」

せつかく会話になったというのに、早速一夏の言葉で顔色を失う少女。まあでも、最初から話を聞いていたところで結果は変わらないような気がするがな。

「まあそう言っただけでやるな、上から目線でも一応は善意だからな」

「それでもどうせこの後には、「無様なあなたに、この私が教授して差し上げますわ」とかいいうんだぜきつと」

「ああ、それはすごく想像できるな」

「だろ？」

「くっ……所詮は男ということですかっ」

そう言い残し、彼女は踵を返した。恐らくは、一夏の想像が凶星だったのだろう。ああ

まで言い当てられては、引き下がるしかなかったらしい。

「やっぱりお前、厄介事に縁があるな」

「楽しそうでいいじゃねえか」

「私は全然楽しくないな。場所は特異でも、平凡な学生生活を送りたかったよ」

私の苦言にも、一夏は悪童そのものの笑みを返すだけ。そんな表

情を見ていれば自然と溜息が流れてしまった。

流れ出た溜息は、すぐに教室内の喧騒に溶けて消えた。周囲からは突き刺さる視線が私にも感じ取れるぐらいに一夏に注がれている。普通の年頃の女性ならば、こんな環境下で出会った唯一の男性に興味を持つのだろうが、そうして現れたのがこないかにもなチンピラでは、興味よりも怯えが先立つのか、こうして遠巻きに見えているだけ。

それをこの馬鹿はわかっているのに、一切省みようとは思っていない。どうせ、女尊男卑などと謳っているくせに外見一つでビビってる奴なんぞ、こちらから願い下げとか思っているんだろう。

それならいっそ、「男のくせに生意気だ」とけんかを吹っかけてくる奴の方が面白いし、相手をするだけの価値がある。そんな戯言を心底思えるような奴だ。（さっきの少女はまあ、からかい甲斐がありそうだったから、ああいう結果になってしまったが）

「——さて、クラス代表を決めようと思う」

教壇の上で教師としてみれば若輩ながらも、威厳に満ちた美声が響く。あの馬鹿とは似ても似つかないが、彼女の名前は織斑千冬と言って一夏の姉だ。

性格は一言でいえば謹厳実直。少なくとも公の場所でふざけた言動をすれば、即座に鉄拳制裁が飛んでくる。そんなのが唯一の肉親であるにもかかわらず、あれだけふざけた言動を一貫して続けられる一夏の馬鹿さ加減には、ほとほと頭が下がる。

そしてその馬鹿さ加減を、一夏はまたもや発揮してくれた。このIS学園において公式行事というのはISによる試合がメインだ。クラス代表というのはその名の通り、クラスの威信を背負う物だ。

自薦・他薦は問わない。という千冬さんの声を受けて、真っ先に上がったのは一夏の名前だった。怯えはしてもそれはそれ、やはりクラスどころか学園唯一の男子生徒を、表に引っ張り出さないという発想は無いのだろう。怯えた声で一夏を推挙するクラスメイトが何人かいた。

「――納得いきませんわっ!!」

響いた怒声は、先程一夏に声をかけた彼女の物だった。縦ロールで綺麗に整えられた金髪を振り乱し、その白磁の様な顔を赤く染めて、彼女は一夏をクラス代表にする愚を語り始める。

「クラスの威信を背負う代表を、このような軽薄な人物に任命するわけにはまいりません。おまけに、ただISを動かすことができるという素人にそのような大役が務まるとは思えません!!」

全く持つて、実に真っ当な言い分だった。これっぽっちも反論できる材料が無い。

「このセシリア・オルコットのよう、実力ある者になるべきですわ」

胸を張ってそう言った彼女、セシリアに対し一夏の反応は――
|。

「ああ、セシリアって名前だったのか、アンタ」

そう言えばあの時、セシリアは名前すら言わせてもらえなかった

な。というか、私も今ようやくセシリアの名前を知った。

「い……言っに事欠いて、今更私の名前を知ったのですかつ、あなたはっ!!」

「いや、お前自己紹介もしないまま帰っただろ」

「け……」

「け？」

「決闘ですわっ!!」

「もうお前にとやかく言うのは疲れた。勝手にしてろ」

この全自動トラブル製造機め。何で入学初日から決闘騒ぎが起きるんだ。コイツは何かトラブルを誘引する未知の物質をまき散らしているんじゃないだろうか。

「おう、勝手に楽しませてもらうぜ」

激怒したセシリア嬢が発端となって、“クラス代表決定とは何の関係もない”決闘が一週間後に取り決められた。クラスメイトはこの決闘の勝者がクラス代表になると思っていたみたいだが、千冬さんがこの馬鹿に権力と名分を持たせては何をするかわからないと、この決闘の勝者に関わらずセシリア・オルコットがクラス代表になることは決定済みだ。

普通ならばこんな経緯で決闘騒ぎが起こるなんてありえない。聞くところによるとセシリア・オルコットはイギリス代表候補生でおまけに専用機持ち。

対して一夏の馬鹿は今までISの操縦経験がない素人で、専用機の方も本当なら支給される筈だったが、「何か成果を上げたわけで

もないのに、どこかの誰かから施し受けろってか？ はっ、冗談きついで」と、日本政府の担当者の前で啖呵を切り、そこから喧々譁々の議論の末に何も手を加えていない量産機を支給するという事になっている。ガンとして意見を曲げない一夏と、防犯上の理由から是が非でもISを所持してほしい日本政府との、それが妥協点だった。

とりあえず一夏の機体は、明日にでも納入されるらしい。射撃の方を得手としている一夏に合わせて、中距離射撃戦に比重を置いた仏・デュノア社製第二世代型量産機<ラファール・リヴァイブ>をわざわざ日本の倉持技研がライセンス料を支払って持ってきたという。

「しかしお前、勝ち目はあるのか？ 端から負ける覚悟で戦いに臨むほど、お前は殊勝じゃないだろう」

私の問いに、一夏は変わらず悪童の笑みを浮かべてのたまった。

「まあ……なんとかするさ」

小賢しいコイツの事だ、本当に何とかするだろう。倦怠感にも似た呆れがそう身を奔る。こうなればこいつを叩きのめして憂さを晴らしてやると意気込んで、持っていた木刀に力を込めた。

一夏は非法法の手段で入手した黒光りするオートマチック——サイレンサー付きのデザートイーグルを構える。中学のころから入り浸っていた不良グループなどの繋がりは未だ残っているようだ。私との勝負には拳銃を持ち出しているこいつは、子供のころはエアガンに始まり、今やデザートイーグルですらなんなく片手打ちできるほどに拳銃を扱いなれている。

しかし、そうしたところでよくもIS学園にまでそんな物を持ちこめるものだと感心する。しかもそんな物を、人気のない校舎裏と

はいえよくも平然と取り出すとは、恐らくはここも監視されている筈だが。

「おいおい、ぼさつとしてんなよ」

素人目にもわかる出鱈目な曲撃ち。乾いた音と共に飛来したプラスチック弾、ノーリアクションで放たれたそれを、しかしその攻撃を予測していた私の木刀が弾き飛ばす。

私とコイツの勝負に、開始の合図など在于るわけがない。不意打ちを食らったほうが間抜けということだ。

迫る試合に向けて、実戦の勘を研ぎ澄ませたいと一夏は放課後に申し出た。とはいえこんな勝負など常日頃からやっているの、今更な申し出ではあった。

私が剣術の修練にのめり込むようになってから、一夏は事あるごとに勝負を吹っかけてきた。曰く、お前に先を行かれるなんて我慢ならない、と。

そうして日を追うごとに、年を重ねることに繰り返された勝負はエスカレートし続け、今の様な本気の喧嘩染みたものになってしまった。

竹刀ではなく、硬い木刀を遠慮なく振る。プラスチック弾頭とはいえ、実銃をむやみやたらにぶつ放す。傍から見れば殺し合いにしか見えない、そんな異常な光景。

私の斬撃が、アイツの銃撃が、互いの皮膚に切り傷を作り、勝負の果てに武器をとり落とせば、そこから先はただの取っ組み合い。磨いた腕も、重ねた経験、そんな一切を無視しての格闘戦。至る所に走る鈍痛が熱を持って私の脳髓を茹で上げる。

コイツにだけは負けたくない。そんな餓鬼の意地としか言えない熱気に浮かされる頭で、いつも私は思うのだ。

——よくもこんな異常を、私の日常＜輝き＞にしてくれたな——

そんな物騒な日常に寮の門限ぎりぎりまで没頭し、何故が同室になつてしまつていた寮の自室に、競い合うようにへたり込む。

「あゝくそ、また引き分けか」

「いい加減に負けろ、一夏」

「馬鹿言え、負けるのは筈の方だろ」

精も根も尽き果てて、そのまま眠つてしまいそうになる欲求に抗いながら、それでもやるべき事があつた。

「なあ一夏、お前をぶちのめして日頃のうつぷんを晴らすのは、私だけの特権だ」

「ああオレも、お前に負けるのは嫌だが、他の誰かに負けるのはもつと嫌だね」

それだけ確認できれば十分だった。一夏は反骨心の塊みたいな奴だから、ならばきつと、奇手奇策小細工何でも使つて、必ずどうにかするだろう。

一週間というのは、本当に短い時間だ。あつという間に勝負当日となつて、私はアリーナの管制室で千冬さんと一緒に一夏とセシリア・オルコットの試合を観戦しようとしていた。そのほかにも、ク拉斯の副担任である山田先生も詰めかけている。

「どう見ます？ 織斑先生」

やはり教師といえども、世界唯一の男性操縦者がどのような戦い方をするのか気になる様で、メガネの奥に好奇心を湛えながら問いかける。

「まあ、普通ならばオルコットの勝ちと見るがな……あの愚弟の事だ。どうせ何がしかの小細工をするに決まっている」

その言葉に、私も内心同意する。アイツ<ラファール・リヴァイブ>が届いた後の実機訓練で、何か閃いたのかもものすごく嫌な笑顔を浮かべていた。

あれはきつと、また何か下らない小細工を考えついたに違いない。そんな奴がただ一方的に負けるといことなど、私も千冬さんも想像すらしていない。

その時、試合開始の合図がアリーナ内に鳴り響き、ディスプレイの中に映っていた二機のISも同時に動き出した。

反発する磁石のように、瞬時に距離をとる<ラファール・リヴァイブ>と<ブルー・ティアーズ>。

初手は同時、IS用の中でも最大の口径を誇る大型ハンドガンを手手にそれぞれ持った一夏と、専用の大型レーザーライフル<スターライトMk?>が同時に火を噴く。

交差する鉛玉と閃光は、しかし互いに空を切った。一夏の顔にはいつもと変わらない人を食ったような笑みが、オルコットの顔には一夏の予想外の攻撃に一瞬だけ強張った表情が張り付いていた。

「成程、ただの的ではないようですわねっ」
「はっ、ほざいてろっ」

そのまま空中で三次元機動をこなしつつ、的確な狙撃を行うオルコット。精妙で優雅な機動を行いつつの狙撃は、オルコットの自負に見合った精度で行われている。

幾度もの閃光が一夏へと降り注ぎ追い立てていく。そんな物を喰らっている一夏の方かというと、それでも笑みを絶やさず……いや、あれはより面白がっているな。ともかく、表情だけには苦痛を見せず必死に逃げ回る。

それでも逃げ回ることができているあたり、素人とは思えない操縦だった。しかし、素人とは思えないだけで、間近の比較対象であるオルコットの機動と見比べれば、その差は歴然だ。

「オルコットさんもすごいですけど、織斑君もすごいですね」

確かに、完全にずぶの素人である一夏がここまで持っているのは、普通ならば驚愕以外の何者でもないのだろう。

「こっちで身体状況を見る限りでは、理想的な興奮状態を維持しているみたいですし、初の実戦だって言うのに緊張とか無いんでしょか」

その山田先生の言葉に、知らず私と千冬さんの嘲笑が重なった。

「くくく、あいつが緊張？」

「そんなに笑いを堪えることでしたか！？」

「当たり前だろう、あの愚弟が緊張？ あらと思うか篤」

「あり得ません、あいつにそんな可愛げがある筈が無い」

私たちの反応に、山田先生はどう返していいのかわからないようだ。私としては一緒になって笑ってやればいいと思うがな。

そんな会話が流れるときにも、一夏は曲芸の様に出鱈目な、それ

でいて的確な狙いの射撃を連発し、オルコットを牽制している。酷い時となると、視線なセシリアをとらえていないのに、それでも銃弾はくブルー・ティアーズ>の至近を通過したぐらいだ。

いくらISが操縦者に全方位の視界を与えとはいえ、その適応能力の高さに舌を巻く。

「それにしても織斑君射撃が上手ですね」

まさか常日頃から実銃ぶっ放しまくっているとは、口が裂けても言えなかった。

「ああ、あの愚弟は“なぜか”射撃が上手くてな」

全てを知っている筈の千冬さんが、意味ありげな視線をこちらに向けつつそうこぼした。というか千冬さんは全て知っている。何せ一夏が発端となった騒動に私ともう一人の幼馴染が一緒になって巻き込まれ、最後は千冬さんの強力な拳骨を喰らうのが、少し前までの日常だった。

そのせいで千冬さんは、一夏の悪事など事細かに知っているし、そのたびに虐待一步手前の制裁を喰らわされているが、それである馬鹿が更生するなんて言うことは一切なかった。

…… 本当に反骨心の塊みたいな奴だな、ひねくれ過ぎだろう。

「本当に粘りますわねっ!!」

苛立ち交じりの声と共に、くブルー・ティアーズ>から四つの飛^{ツト}翔体が分離する。自律行動するそれは、まるで主の命を受け獲物を狙う猟犬の様に一夏を追いたてる。喰らい付くのは牙ではなくビーム砲だ。

「おいおい、そんなのありかよ」

空になった弾倉をグリップから排出し、新たな弾倉をグリップ内部に量子展開しながら、襲いかかる四つの猟犬に対し愚痴を漏らす。

「あら？　ここにきて怖気付かれたのかしら、それとも降参したくなり了吗の？」

「バゝカ、こういうところで勝ってこそ、株が上がるってもんだろ？」

追い立て続けられながらも、その眼に宿る闘志には微塵の揺らぎもない。いやむしろ、今こそが勝負どころだと思ったのか、一夏は追いすぎる四つのビットを無視して、ハンドガンを格納し、両手に手持ち式のシールドを展開する。

「大言壮語した割に、行うことが特攻とは浅はかですわねっ！！」

真正面からくるのならば、ビットを使わずともくスターライト Mk?>による射撃で十分と判断したのか、強力無比な閃光が一夏の手に持つシールドに赤く溶けた弾痕を刻む。

現用火器に対しては圧倒的な防御力を誇る筈のシールドは、たった数発のレーザー照射で爆碎されて用を成さなくなる。

「——いいや、ここまで近づけば十分だ」

だが、ある程度は距離を詰めることには成功している。——
そう投擲物が当たるぐらいには、一夏とセシリアの距離は縮まっていた。

それはぱつと見る限りでは、何がしかの爆発物なのかと思わせた。ハンドグレネードか、あるいは音響閃光弾か、それで隙を作ろうという心算だろうか。

「そんな物が奥の手？ 無意味ですわっ」

身を翻し直撃コースから外れ、例え爆発やら閃光やらが飛び出したところで、ISのシールドはそれらを完璧に防ぐだろう。

セシリアの言う通り、一夏の奇策は不発に終わるのだろうか。そんな表情が観客の生徒や山田先生の顔に張り付く中、私と千冬さんは全く別の事を考えていた。

((……………あの缶詰、あの馬鹿まだ持っていたのかっ！？))

そもそもあれは武器でも何でもない缶詰じゃないか。去年あの馬鹿が話の種としていくつか買って惨劇を引き起こした、ある意味劇物の缶詰。最早食用としても期限切れとなつて、完全に生ごみと化した缶詰を、一夏はセシリアの間近で撃ちぬいた。

——そう、世界一臭い食べ物として有名な、シュールストレミングの缶詰を、だ。

飛散する内容物、完全に発酵しきつてドロドロの液体と化したそれが、弾丸によって空中にぶちまけられて、最早匂いの毒と称せる様な臭気をばらまいた。

臭気という極小の微粒子に、ISのシールドが自動で反応する筈もなく、オルコットの整った鼻筋に開いた鼻腔が蹂躪される。

オルコットの顔が、予期せぬ刺激に歪み苦悶の表情を浮かべる。

「ぐっ！？ 何なんですのっこれはっ！！」

流石のISでも、極悪な腐臭からは操縦者を守らなかつたらしい。設定すれば防げるだろうが、何処の世界にISへそんな設定をする馬鹿がいるのか、あんな臭いを間近に食らってオルコットの動きが止まる。

「オレの秘策。ということで俺の勝ちだな」

そして、あらかじめそういう設定をしていた馬鹿は、何の影響も受けずにオルコットとの距離を詰め、零距离からのハンドガン全弾発射で<ブルー・ティアーズ>のエネルギーを零にした。

一応は一夏の勝利ということで幕を閉じた決闘の後、オルコットは一夏に鬼の形相で詰め寄った。

「あなたっ、あんな手段で勝つなどと恥は無いのですかっ！！」

「はあ！？ お前本気で言ってるの？ 俺が素人だってわかっていただろ」

「それとこれとは話が別です！！ 私が言いたいのは、素人ならば素人なりに真面目におやりなさいということですよっ！！」

千冬さんや私がいる前で、オルコットは至極真つ当な反論をした。したつもりだったのだろう。少なくとも彼女にとってしてみればそれはその通りだったが――。

「お前馬鹿かよ」

「なっ！？」

一夏の反論に、言葉を失った。齟齬が無い理論展開を前にしてすら、未だ私を侮辱するのか、とその表情だけでも明確に読み取れた。

「ああ確かに、オレは素人で、ISの試合って言う点ではあらゆる面でお前に負けるよ。けどな、だからこそ、オレはお前に勝つために持てる物全てを使った。——少なくとも、オレは使える手段全部使って戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦った。そこに誓って嘘はねえよ」

そんな一夏の“らしい”言い分に、つい顔がほころんでしまいそうになる。それは私だけでなく、千冬さんも同様だったみたいで、その顔に苦笑を湛えながら二人の間に割って入った。

「そこまでしておけオルコット、確かにこの馬鹿の手段は手放しで褒められるものではないが、それでもお前が最初から全力で臨めば、こんな結果にはならなかっただろう」

「………それ、は」

「悔しいと思うのならば、それを糧にして増長することの愚かさを学べ。そして今度この馬鹿と一戦交えるときは完膚なきまでに叩きのめしてやるといい」

「ええそうですね、私がこの程度だと、こんな下劣な男に思われたままでは私のプライドに関わります！！」

「その意気だ、オルコット」

気炎を燃やすオルコットを見て、千冬さんは満足げな笑みを見せ、一夏もまた面白そうだと笑顔を見せた。

「やっぱりここは面白そうだなあ、箒」

「ふん、ここでもまたお前の騒動に巻き込まれるかと思うと、頭が痛くてかなわない」

——それでもなお、皆につられて笑ってしまうのが、無性に腹が立って仕方がなかった。

第一話（後書き）

<あとがき>

ルートとしては先輩ルート後、一夏は司狼の転生体で箒は蓮の転生体です。箒の方は蓮の成分が薄まっていますが、一夏の方はがっつり色濃く残っているという感じで、そして鈴はバカスミポジション。そして一夏のISが単一能力を発動した場合、間違いなくIS版のマリゲナントチューマー・アポトーシスになるでしょう。

第二話

「――織斑、一夏」

身に染みついた悪臭を更衣室のシャワーで洗い流しながら、私に屈辱を与えた人物の名を呟いた。その呟きはすぐに水の流れる音に掻き消されたが、それでも、その名は胸の奥に宿り続けている。

あの男は最初から気に喰わなかった。髪を染め上げ、タトゥーを入れて、その見た目からして下劣な雰囲気を漂わせていた。

そんな状況だから、他のクラスメイトは彼を怖がって遠巻きに見つめるだけ。唯一の例外と言えば、確か篠ノ之箒という名前のクラスメイトだけ。ならばそう、この私が状況を変えるきっかけになるうと意を決し話しかけてみれば、端から私の話を聞こうともしなかった。

嘲笑うような口調でこちらを煙に巻くだけ、正直言って何故篠ノ之さんはこんな男と親しげにしているのか、まったくもってわからなかった。何一つとして美点が無い男。ただISを動かせたというだけで、名誉あるIS学園の門をくぐった不屈き者。完全に素人だということのならそれ相応の立ち居振る舞いがあるはず。素人だという状況に胡坐をかいてはいけなはずだった。

「でも……あの言葉は」

そんな人物をクラスの代表にさせまいと義務感に駆られ、決闘を挑んだ。そのこと自体に否は無い。

一時の腑抜けた気分であの男を代表に選び、そうしてクラスメイト全員に屈辱が降りかかるなど、決して受け入れることができなかった。

だからそう、自分がどれほどの事を分不相応にも行おうとしてい

るのか教育してやろうと思ひ立ち、あの決闘に臨んだ。

そう、元から試合をしようと、戦おうと思つてすらいなかった。

『——— 少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ』

不意打ちをされて、腐つた生ごみと化した缶詰を投げつけられて、耐えがたい腐臭を擦り付けられて、でもそれら全ては、私を強敵と認め、自身より格上と認め、それでもなお勝ちをもぎ取ろうと足掻いた結果ではなかったのか。

引き換え、私はどうだったか。驕り高ぶり、あの男を世の中に溢れかえる牙無き腑抜けた雄と同一視し、教育してやると手心を加えた。ビットを使うまでもないと、戦力の温存などという手抜きを行った。

「負けて——— 当然ですわね」

そう、当然だった。負けて当然だった。私の半分の力を、あの男の全力が打ち破つた。私こそが、あの決闘において不真面目に過ぎたのだ。

降り注ぐシャワーの冷たさが頭の芯を冷やし、私の脳髓に宿つていた驕慢という余分な熱を洗い流していく。代わりに浮きあがってくるのは、なぜこんな自明の理に思い至らなかったのかという悔恨。

——— 悔しかった。

悔しい、悔しいに決まっている。元から私の掌の中にあつた勝利は、

私自身が取りこぼしてしまった。後悔は、後の祭りだからこそその後悔なのだと、理屈ではなく実感で思い知った。

もしも――もしもの話だ。あの決闘において驕ることなく、初手から全力であの男を叩き伏せていれば、今なお心中に渦巻く悔恨など抱えることなく、クラスの威信を背負っていけた筈だった。

そんな未来はもう無いのだ。これからはずっとこの悔恨を抱えて、クラス代表などという物をやり続けなければならない。

「くっ……くっ……あぁっ……」

嗚咽が堪え切れずに溢れ出る。伝う涙が、どうしようもなく熱かった。何がイギリス代表候補生だ。何がクラス代表に相応しい人物だ。私は、そんな肩書に全く相応しくなかった。

試合直後はまだあの男に対する怒りがあった。けれど熱は、時間の経過と共に冷めゆくのだ。最早この悔しさの矛先として至当なのは、自分自身だけだった。

悔しい。後悔。悔恨。そんな感情が渦巻いて、降り注ぐ水のように、自分自身も堕ちていく錯覚を味わう。思考も視点も定まらない。底無しの沼にどつぷりと沈んでいくようだった。

「あゝ、邪魔したか？」

そんな状況では、学園の生徒ならばだれでも使えるこのシャワー室に、誰かが入ってくるなど思い至りもしなかった。

「……あの馬鹿はああいう奴だから、仕返しするなら全力でやってくれ」

「え……えっと、その」

「いいよ、別に言葉にしなくても。公衆の面前であんな真似やられたんだから」

声をかけてきたのは、つい今しがたまで私の心中を埋め尽くしていたあの男——織斑一夏——と唯一親しげにしていたクラスメイト。

「篠ノ之——箒さんでよろしかったかしら」

「そう、あの馬鹿とは腐れ縁の篠ノ之箒だよ」

溜息をつき、自身で発した言葉が真実であるのが心底嫌そうに感じている様な表情で、篠ノ之さんはシャワーの個室を仕切るドアの前に立っている。私はシャワーを止めて、冷え切った体に纏わり付く水滴をバスタオルで拭き取りながら、個室を出て篠ノ之さんと改めて向き合った。

「とりあえずほれ、購買で消臭スプレーをありったけ買ってきたから」

突き出された右手に握られていたビニール袋の中には、確かに消臭スプレーの缶がぎっしり入っていた。もしかしなくともこれは私の為に買いそろえられたものだろう。

「あ、ありがとう」

とりあえずの礼を述べて、篠ノ之さんの手からビニール袋を受け取る。それは、私の為に買ってくれた物。“負けた私の為に”買ってくれた物だ。

きつと篠ノ之さんは、私の事を慮って買ってきてくれたのだろう。あの悪臭はきついからなかなか取れないだろうと、些細な気遣いのもとに行った行為。

「……ぐすっ……うつっ……」

それが、尚更私の心を抉った。突き刺すような敵意なら、憤怒と敵愾心で対抗できる。けれど、優しく溶け込む心尽くしにどう抗えというのだ。自分自身が直視に耐えないほどに、とてつもなく惨めだった。

「それじゃ、私は帰るよ」

膝をつき泣き崩れる私に対し、篠ノ之さんは何も言わず踵を返し、何事もなかったかのように立ち去った。

今の惨めな私に対し、同情も憐れみも何もかけることなく、立ち去ってくれた。グチャグチャに渦巻く感情が心中を満たす中でも、その気遣いだけはありがたいと感じることができた。

シャワー室を出た後に私を出迎えたのは、更衣室のベンチで葉巻を吹かしていた織斑先生だった。小さな灯がともる葉巻の先から立ち上る煙が私の鼻腔をくすぐる。生憎と、葉巻の煙自体は嗅ぎ慣れない物だったので、決していい香りだったとは思えなかったが、それでもあの時の悪臭に比べればいい香りと断言できた。

「——大丈夫か？」

「それなりに、頭は冷えています」

正直に言えば、織斑先生がこんなことを言うとは思わず、応えを返す時もそんな心境が表に出ていないかどうか気が気でなかった。

「そうか、似合わんか。私が生徒を氣遣うのが」

訂正。しっかりと私の心境は悟られていたようだ。

「まあ、長いこと洗えばなしだったのは、それなりに効果が出た
ようだなによりだ」

「ええ、いろいろ流せました」

「なら、一つだけ聞こう。——クラス代表、やれるか？」

織斑先生は、葉巻を携帯灰皿の奥底にねじ込んで火を消し、真正
面から私の瞳を見据え短く問うた。

「——
勿論」

逡巡はある。躊躇いもある。あんな無様を晒してもなお、それで
もクラス代表などと虚勢を張るのか、という自虐の気持ちもある。

「やる限りは、真面目にやらせていただきます」

それでも、これは自分に課せられた役目なのだ。それをたった一
度の失敗で、もう恥の上塗りをしたくないからやりたくありません
など、不真面目の極みだろう。

ならばここで逃げるからこそが恥だ。そんなことをあの男に知れ
ようものなら、死んだ方がましだ。

故にこみあげてくる諸々一切を飲み込んで、私は精一杯の虚勢を
張った。私は出来る限りの最善を尽くすと、眼前の女傑に対して声
高々に言い切った。

「そうか、なら頑張れよ」

織斑先生はただ、何処となく満足そうな微かな笑みを浮かべて、そう言った。

その日の夜遅く、私は寮の屋上で一人たたずんでいた。流れる夜風が私の頬を優しく撫でていき、あまりにも激動の一日であった今日の疲労を溶かしていく。

「何だ、お前もここにいたのか」

「奇遇だな、オルコット」

ほんと、今日という日はこの二人に縁があるらしい。私の頬を撫でた夜風が、染め上げた金髪と、リボンで纏められた黒髪を撫でていった。

二人の手にはジュースやらスナック菓子が少々多めに入ったビニール袋がある。それを持ってここに来たということは、恐らくそういうことなのだろう。今日は夜風が心地いい上に、雲ひとつない夜空には星の瞬きが映し出されている。シチュエーションとしては最適だろう。

「……私はここで失礼しますわ」

そんな場所に、私が居ていい筈がない。この場所でこれから行われるのは勝者の宴。断じて敗者の居場所ではない。

「おいおい、付き合い悪すぎるだろ」

二人の横を抜け、屋上から降りようとした私の腕を、織斑一夏が掴んで引き留めた。そのまま私を無理矢理座らせ、二人も同じく腰を下ろした。

「このまま私を蹴りものにしようという魂胆ですか？」

「え、そういうプレイが好きなお前？ 俺はただ単に一緒に騒ごうと思ったただだよ」

険のある言葉を吐き出す私に対して、織斑一夏は悪戯つ子の様な笑みを浮かべてジュースの缶を差し出した。正直にいえばすぐ自分の部屋へ帰りたいが、差し出された物を無碍に扱うことも少しばかり罪悪感があった。

だから、私は缶を受け取り、プルタブを上げて飲み口を開けてジュースに口を付けた。大量生産品の安っぽい味が、私の喉を滑り落ちていく。普通のジュースにしては、ちょっとだけ味に違和感があったが、それでも半ば自棄になっている私にとっては一息に飲み干せる程度でしかなかった。

「いい飲みっぷりだぜ、セシリア」

「生憎と、あなたに呼び捨てられるほど私の名前は安くありませんが」

「じゃあお前も俺を好きなように呼べよ」

「では、——馬鹿で、ああ、この響きはあなたに実によく似合っておりますわ」

「おいおい、そりゃあねえだろ」

「何言ってる、お前を馬鹿以外の何と呼べばいいんだ？」

「うわひつでえ、こいつら人でなしだわ。せつかく俺様が和やかな雰囲気を出してやろうと思ってるのに、こいつらそれを無視してくれやがりましたよ」

「そうか？ お前を馬鹿と呼ぶのは私たちの精神にこの上ない安堵を与えてくれるぞ」

「というか、あなたを馬鹿以外と呼ぶとその違和感が私たちの精神にこの上ない負担を与えますので」

普通ならば喧嘩を売っているとは思えない様な私の発言にも、織斑一夏は堪えた様子などまるでなく、それどころかこちらに合わせるかのようにさらにおどけた言葉を返してくれた。篠ノ之さんもその流れに乗ってきて、更にふざけた会話の応酬を続けていく。

「チツ、へこんで落ち込んでるセシリアを酒の肴にしようと思っただのによ」

「当てが外れた様で申し訳ございませんわ。まあ所詮、あなたなどその程度ということでしょう」

「所詮は馬鹿だからな、馬鹿しかやらん」

「何言ってやがる。決闘であんなにも華麗な頭脳プレイを見せてやつただろうが」

「すまん、オルコット。——見ての通りこいつは救いようが無くてな」

「ええ、そんな物初めからわかり切ってます」

下らない、言葉の応酬。けど、勝者の場所とか敗者の惨めさとか、そんな無為な思考はすっかり抜け落ちていた。

代わりに浮かび上がってくるのは、こんな下らない事を笑いあえることへの喜び。そう、今私は笑っていた。

意識せずに、自然と、心の底から笑えていた。

「ふふっ、あははははっ」

思わず漏れ出た大笑に、二人も笑顔で返してくれた。思えばこん

なに心の底から笑ったのは初めてかもしれない。

「そうそう、酒の席なんだから笑ってりゃあいいんだよ」

「確かに、仏頂面で酒を飲まれるのは勘弁願いたい」

しかし、何故だろう、何かものすごく違和感があるような。この二人と楽しく会話して、おいしいジュースと安っぽいスナック菓子をつまんでいる。学生同士の下らない小ぢんまりとした騒ぎの筈だ。別ににもおかしいところは無い筈――。

「……………って酒とはどういうことですかっ!？」

叫ぶと同時、飲み干した空の缶に記載されている製品情報を読んでいく。間違いであってくれとの願いもむなしく、そこにははつきりと酒という一文字と、アルコール度数の表記が印刷されていた。

「どうって？ ジュースなんぞで騒げるはずねえだろ」

「それに缶チューハイなんてジュースと変わらん。そう気にするな」
「そっという問題ですかっ!!」

学校で飲酒を勧めるとは、道理でジュースの味に違和感を感じた筈です。もうすでに私も何本か飲み干した後なので、大声を出すだけで頭がくらくらします。

「そもそも、学園の購買に酒など売っていない筈でしょうっ!!」

仮にも高校であるIS学園で酒など売っている筈はない。それならどうやってこの大量の酒を手に入れたのか、私の問いかけに織斑

一夏はさも当然の様に言い放った。

「ああ？　んなもん姉貴の部屋からかつぱらってきたに決まってるだろ」

姉貴？　織斑一夏の姉とは当然、あの織斑先生の事にきまっている。その織斑先生は学園の寮監も勤めていて、寮内には先生の自室もある。そこに不法侵入し酒を盗んだ？

「正気ですのっ！？」

「スリルがあつて楽しいだろ？」

「自殺行為でしかありませんわっ！！」

神をも恐れぬ所業を誇らしげにすら言い切つて、織斑一夏は胸を張つて笑つていた。馬鹿だ。心底の馬鹿が私の眼前にいる。馬鹿だ馬鹿だと思つていたが、よもやここまで大馬鹿であるとは思つていなかった。

「篠ノ之さんもこの馬鹿を止めてください！！」

「言つて止まるような馬鹿でもないだろう。何かあつたらこの馬鹿が全ての元凶ということにしておけ」

そう言つて篠ノ之さんは缶チューハイを新たに一本飲み干した。飲み干した空の缶を地面において、世界の真実を諭す様にしみじみと呟いた。

「だから言つただろう？　コイツは心底の馬鹿だ、と」

「そうでした、この馬鹿は真正の馬鹿でしたわ」

「こついうときは、酒でも飲んでストレスを発散するに限るぞ。ほらもう一本どうだ？」

「ありがたく頂きますわ」

既に私も、相当アルコールが頭に回っているのだろう。口ではなんだかんだ言いながらも、勧められた酒を勧められるがままに飲んでいく。

「――随分とまあ、楽しくやっているじゃないか、ええ？」

その直後、そんな酔いを完膚なきまでに吹き飛ばす、絶対零度の声が響いた。

「……織……斑……先生？」

自分の首がまるで錆びついた機械の様に重く感じられ、錆びついた金属の軋む音すら幻聴として聞こえてきそうなほどに、私はゆっくりと振り返った。

そこにいたのは勿論、能面の様な感情を排した表情に、凍て付く冷気のような怒りの雰囲気を纏った、今の私にとっては死神同然の存在である織斑先生だった。

「ああそうだ、あの愚弟に酒をかすめ取られた織斑先生だぞ」

もう完璧、間違いないなく織斑先生は怒り狂っている。

「こ、これはですねっ、あの馬鹿に騙された結果というか、私は最初酒とは露も知らず――」

振り返って元凶である馬鹿を睨みつけようとした――が、そこには飲み散らかされた空き缶と、食い散らかされたスナック菓子のゴミがあるだけ。当の織斑一夏は影も形も存在していなかった。

「――っていないっ!？」

見上げてみれば夜空に一つ、星が追加されていた。織斑一夏の駆るくらファール・リヴァイブのスラスターの光という星が。

「それじゃあお休み」

そして篠ノ之さんもまた、懐から取り出したロープを屋上の柵に巻きつけ階下に飛び降りていた。それじゃあ後は頼むといわんばかりの表情を浮かべた篠ノ之さんの顔が、夜の暗闇の中へと落下していく。

つまりは、私を含めた三人の中で、ここにいるのは既に私一人。織斑千冬という最強最悪の死神を前にして、あの二人は私一人を矢面に立たせてとっと逃げてくれやがったのだ。

「逃げたあ!？ あの手鹿二人、私だけ置いて逃げやがりましたのっ!！」

「ああ、もう何もいうな。状況などわかり切っていることだからな、これだけで済ましてやる」

直後、私の頭頂部に鉄鎚の様な衝撃が降り注ぐ。織斑先生の拳骨は、すごく痛かった。

「お前の尊い犠牲は、きつと寝るまでは覚えておくさ」

ISというのは、事その他逃げるのには便利だと、一夏は初めてISというものに嫌悪以外の感情を抱いた。特にあの最強の姉からこゝも逃走を成功させるほどの機動力は惚れ惚れすると、世のIS操縦者が聞けば烈火の如く怒る感想を持っていた。

「——で？ オレ、覗き見するのはいいけど、されるのは趣味じゃないんだよ」

夜の暗闇の中、一夏はだれもないはずの方向へと言葉をかけた。何も無く、誰もいない。返答など帰ってくるはずもない場所への問いかけは、しかし——。

「あら、勘が いい のね。 気配は消していた筈なのに」

暗闇から現れたのは、IS学園の制服を身に纏った一人の女生徒。恐らくは笑みを湛えているであろう口元を扇子で覆い隠しながら、悠然と一夏の方に歩み寄る。その足取りに揺らぎはなく、明確な自負に溢れた物だった。

その性根が、一夏の目には元より豊満な肢体と美麗な容姿を持つその女を、更に輝かせているように見えた。

その姿に、一夏はどこことなく自分と似たようなものを感じ取っていた。これはひよっとすると、結構な当たりなのかもしれないと、自身の口元に笑みを浮かべた。

「こんばんは色女、こんな夜遅くにどうしたよ、デートのお誘いかな？」

「そんなところよ、織斑一夏君。今日の戦い見てたらさ、どうしてもあなたとお話ししたくなっちゃった」

「そりゃ結構、俺の周りにや見る目ない奴多かったけどよ、アンタみたいな上玉にそう言われるとはね」

「あら、ついてないのね」

「アンタがオレと付き合ってくれるなら、ついてるに変わるぜ？」

「あら駄目よ、がつつき過ぎは良くないわ」

「そいつは失敬、何せいい女には縁が無くてね、アンタを逃すと一生縁が無い様な気がしてた」

「それにまず、聞くべきことがあるでしょう？」

「ああそうだった、色女さん？ お近づきの印にアンタの名前教えちゃくれないか？」

その一夏の問いかけに、女は満足げな笑みと、微かな寂寥感を滲ませて自身の名前を口にした。

「楯無——更識楯無よ」

女は更識楯無と名乗る、事実その名前は学園のデータベースにも記載されている、彼女の名前としては至極適当な物だ。それでも、一夏にとっては、そうではなかった。

「おいおい、オレはアンタの名前を教えてくれって言ってるんだぜ？」

不快感をあらわにして、一夏は余人が聞けば意味不明な言葉の羅列をのたまった。一夏の耳には、さっきの音の羅列を人の名前として受け入れたくはなかったから。

「流石、————やっぱり君ならそう言ってくれると思ってた」

けれどその意味不明な返答こそは、彼女が望んだものだった。それを聞いたかった。君ならきつとそう答えてくれると願っていたから。彼女はさつきとは違う、一片の曇りもない満足げな笑みを浮かべた。

「テメエが誇れない物が、そいつの名前であつてたまるかよ」

「うん、そうだね。ほんと、君の言うとおりだよ。楯無つてのはね、更識の家が代々当主に継がせている名前なの。うちの家は古くから世の裏側のあれやこれやを生業にしてきたからさ、そういうしきたりが残ってるの」

「はっ、馬鹿じゃねえの、“誰かが継げる名前なら、そもそもそんな名前は塵同然だろうが”」

そう、一夏にとって、更識楯無という音の羅列は、とてもではないが人の名前とは認識できなかった。

人の名前とは、そいつ自身が世界に向き合う為の唯一無二の証だと、自分自身がそう強く認識しているからこそ、楯無という音の羅列の裏にあるものに気が付いた。

「昔はほんとの名前があつただけだね、今はもう楯無しか名乗らせてもらえない」

「アンタも災難だな。どうせ古臭い黴の生えた老人どもが、絶やしではならぬ誇りだ、とかぬかしてるんだろ？」

そんな物は、今を真面目に生きている奴にとっては冒涇以外に他ならないと、一夏は嫌悪感をあらわにする。名前を継がすなら、継ぐべきそいつ自身が誇りを持ってその名前を受け継がないと意味が無いだろう。受け継がさせるという行為自体が、その名前を冒涇しているとなぜ気付かないのかと、一夏はここにいない見知らぬ誰か

に怒りを抱いた。

「色男だね、君は」

その感情が、わかりやす過ぎるほど瞭然に漏れ出しているから、高々数分しか会話していない一夏を、彼女は心底気に入った。

「真面目に生きてる」

髪を金に染め、腕にはタトゥーを入れて、言葉の端々からも滲み出る素行の悪さは、決して真面目とは評せないだろう。けれども、彼は織斑一夏として世界に向き合い真面目に生きているのだと、彼女は理解した。

「おうよ、オレは真面目だぜ」

そう言っただけ悪童の笑みを浮かべる一夏に、彼女はせめてこれだけは告げようと意を決した。

「じゃあさ、私の事はエリーって呼んでよ」

もう彼女の真の名前は、記録から抹消され、暗示すら掛けられ、当の彼女自身ですら思い出せない。思い出せるのは、自分の名前は楯無なんかじゃないと、そんな古臭過ぎて腐った音の羅列なんかじゃないという怒りだけ。

「エリー？」

「そう、エリー。昔読んだ漫画の中の、気に入った登場人物の名前」

真実の名前はもう既になく、与えられたのは望まぬ黴の生えた音の羅列。ならば、せめて気に入った音の羅列を己が名前として認識してくれと、彼女は言い切った。

「そうか。まあまあいけるんじゃないのか、エリー」

その響きこそを、彼女に至当だと一夏は笑い。慈しみを込めてその響きを紡ぐ。ままならない現実に腐る奴らが多い世の中、それでも彼女は腐っていない、前を向いている奴だと知ったが故に、響きに乘せた意思は一夏の心の奥底からの物だった。

「他の誰かがいるときは、そうだね……会長とでも呼んでよ」

「OK、エリー」

「それじゃあ、もう夜も遅いし、私はここで退散するね」

そう言っただけでエリーは踵を返し、再び夜の暗闇の中に消えていく。

「おやすみ、一夏」

「おやすみ、エリー」

交わし合い、刻みあったその名前だけで、今宵の出会いに価値はあったと互いに思いながら。

——翌日。

「よくまああ、この私を捨て駒扱いにしてくれましたわねっ!!」

「ヤッホー一夏、今日も元気そうね」

「……朝も早くから、全開だなお前」

教室に入った一夏を出迎えたのは、鬼の形相で詰め寄るセシリアと、それを面白そうに眺めるエリーの姿だった。

傍らにいた篤が、その光景に心底呆れ果てた表情を見せる中、当の一夏は当然面白そうな表情を湛えている。

「お前だつて飲んでたじゃん。どうだったよ、人生初のただ酒の味は」

「あの子の織斑先生の拳骨の方がよほど記憶に残っておりますっ！」

「おお、ありや効くよな。あれ喰らったら二日酔いなんかしないだろう」

「わああ、セシリアちゃんつてもしかして不良？」

「そんなわけ無いに決まってるでしょう！！　そもそもあなた誰ですかつ！！」

「……もう死ねよ一夏、お願いだから騒ぎを起こすなら私の目の届かないところでやってくれ」

キレルセシリア、それを面白そうにからかう一夏とエリー、その混沌とした光景に頭を抱える篤。他のクラスメイトはその光景についていけず、言葉を失うだけだった。

「——あんな本当に変わらないわね」

そこに割り込む第三者の声に、クラスの耳目が集まった。見れば教室の入り口に活発さを滲ませた小柄な女生徒が立ち尽くしていた。

ツインテールに纏められた髪が微かに揺れ、その瞳には眼前の光景に対しての呆れが滲んでいる。

「何だウリ坊、お前日本に帰ってきてたのかよ」

まあ確かに、小柄で活発そうなその彼女に対して、ウリ坊というあだ名はよく似合っているのかもしれない。だがどこの世界にウリ坊と呼ばれ喜ぶ年頃の乙女がいるというのか。

「誰がウリ坊だこらああああああっ!!」

混沌とした朝の光景に、小柄な少女による全力全霊のドロップキックが追加された。

第二話（後書き）

<あとがき>

会長の設定を生かして、本当に会長をエリーにしちゃったぜ。そして鈴はずっとこんな扱い。

あとシャルロットは当然マリイポジなんだけど、そうすると結構悲惨な目にあうというか、一番えぐい目にあうというか。ラウラのほうは原作そのまんまで出すつもりなんですけどね。………銀髪眼帯ドイツ出身ということから、シュライバー化したラウラを想像しましたが、そんなの書けるわけがねえ。

第三話

あたしが——凰鈴音が——あいつらと出会ったのは、小学五年生の時。

「お前中国人なんだろう？」

「だったらリンリンって呼ばうぜ、パンダみたいで似合ってるじゃん」

「うるさい、私パンダなんかじゃないもん！！」

子どもというのは結構異物を排斥したがるものだ。クラスの中で唯一の中国人であつたあたしは、クラスの悪餓鬼どもにとつては格好の獲物、よつてたかられてからかわれ続けた。誰もあたしの訴えに耳を傾けてくれなくて、あたしに出来たのは泣きながら叫び続けることだけ。

「——うわくつせえ、ひんまがつた根性つてこんなに臭いんだな。つうわけで消えろよカス共」

「——見苦しい。お前らうざいから消えてくれ」

そんなとき現れたのがあの二人、一夏と箒だつた。あいつらは出会った時から変わらなくて、厄介事に率先して首を突っ込む一夏に、心底呆れたような顔をしながらも箒がついていく、そんな今と全く変わらない雰囲気を纏ってあいつらはあたしの前に現れた。

「何だよお前ら！！」

「何って、決まってるじゃねえか。お前らうざいから消えろってことだよ」

「こっちは十人以上いるんだぞ、勝てると思ってんのか」

所詮は女の子いじめる様な屑どもだから、臆面もなく数の利を誇示して一夏と箒を恫喝した。けど、あの二人はそんな物一顧だにしないで、むしろそれがどうしたといわんばかりの小馬鹿にした笑みを浮かべた。箒なんか無表情に見せかけた嬉々とした表情で、箒を刀のように構えていたし。

「じゃあ私は武器を使おう、私は女でか弱いからな、骨折っても知らんぞ？」

「なっ！？ お前卑怯だぞ！！」

「うっわ聞きました箒さん？ こいつら寄ってたかって一人の女の子苛めていたのに卑怯なんだとぬかしましたよ？ 心底屑だわこいつら。というかお前それ駄洒落？ 箒が箒構えるなんて寒すぎるぜ——うおわっ！？」

「よしわかった、先にお前をばこる」

「……舐めてんじゃねえぞ、この糞があっ！！」

最早いじめっ子どもなど眼中になく、箒の放つ一撃を軽やかによけまくる一夏。そんな二人の様子にいじめっ子どもは我慢ならないといった感じで二人に襲いかかった。

「バーカ、テメエらなんぞいくらいたところで意味ねえよ」

「半分はやれよ、一夏」

「むしろこっちの台詞だったの」

——結局、いじめっ子どもはあっけなく一夏と箒に返り討ちにされた。あたしはそれをボーっと見ているだけで、結局何もできなかった。

「……あ、ありがとう」

できたことと言えば、いじめっ子どもが全員叩きのめされてから、助けてくれた二人に礼を言うぐらい。でもこの二人はずっと、素直という言葉から縁の無い奴らだったから。

「別にお前の為じゃねえよ、このカス共が不快だったからぶちのめしただけさ」

「ああ、見苦しい上にずかずかとこっちの視界に映り込んできたからな」

素直じゃないその答えが、とっても重なったものだったから、口ではなんだかんだ言いつつも、この二人はきつとすごく仲がいいんだろうなって思ったの。転校してきたばかりで友達なんかまだ誰もいなかったから、その時のあたしには二人がすっごく眩しく見えた。

「ねえ、私の名前は凰鈴音。その——友達になってくれない？」

だから、私もその中に混ざれたらいいな、って思ったら、自然とそんな言葉を言えた。

「おういいぜ、特別に友達にしてやろう」

「……好きにしろ、この馬鹿と比べたら誰だってましだ」

捻くれた返事だったけど、二人はあっさりとあたしを受け入れてくれた。それが、二人との騒がしくも楽しい日々の始まりだった。

そして今日、一年ぶりに再会したその親友たちは――。

「ぶふおっ!？」

「ぐはっ!？」

「この馬鹿共が、よくもあんなふざけた真似をしてくれたな」

――千冬さんに強烈なアッパーを喰らって、とてつもなく見事な車田落ちを披露してくれた。

いやもう、普通は一年ぶりの感動の再会なんじゃないの？ とか思ったけど一夏の馬鹿は初っ端からあたしの事をウリ坊呼ばわりするし、ついついそんな馬鹿に対してドロップキックをかましてしまし、勿論そんな一撃を一夏の馬鹿がまともに食らうわけ無くて、あっさりと避けて「久しぶりだな、おい」とか言いつつあたしの頭を撫でまわしてくるし、箒も一緒に「久しぶりだな、ウリ坊」とか言って頭撫でまわしてくるし、そりゃ、正直言っであたしの頭を撫でてくれるその感触に涙ぐみそうになったけどさ、もうちょっとこう、感動的な再会にならなかったのかしら。

「何をやっているこの馬鹿共、もうチャイムは鳴っているぞ」

そしてそうこうしているうちに千冬さんが登場。しかも元から威圧感たつぷりの人だったけど、なんか当社比120%増しで威圧感増えてたわね。それでその千冬さんは教室内に入ってくるや否や、一夏と箒にアッパーを喰らわせて今に至るというわけ。

ああこれは絶対、一夏と箒がなんかやらかしたなって思ったわよ。よくもまあ、あの千冬さんの逆鱗に触れる行為を懲りずにやれるわね。絶対一夏がやらかした行為に、箒が口ではなんだかんだ言いつつ付き合ってたと思う。見れば、教室内にいた金髪縦ロールの奴も千冬さんの一撃を目の当たりにして頭抑えてる。あれはきつとあの

子も千冬さんの一撃をくらったことあるわね、私も一夏の馬鹿行為に巻き込まれて喰らったことあるけど、すつごく痛いよね。ああダメ、思い出したらあの痛みがぶり返してきそう。

「……………ほんと、何にも変わって無いわね」

そんな、一年前にあたしの元から過ぎ去った日常は、あの楽しい日々は変わらずここにあった。一夏は相変わらず馬鹿だし、箒は自分は馬鹿じゃないと大人ぶってるけど、その実一夏と同レベルの馬鹿だし、二人は何にも変わっていなかった。

「——泣くなウリ坊、今生の別れてわけじゃないからよ。向こうで腐ってるんじゃないぞ。俺たちはずっと“ここ”にいるからまた会いに来いよ。その時はまた、一緒に騒ごうや」

一年前のあの時、空港での別れ際、そう言ってあたしの頭を撫でてくれた一夏はちゃんと約束を守ってくれていた。そのありふれたけれども大切な光景に、涙が溢れ出そうになるのを堪え、あたしは自分の教室に戻った。

もうちょつと話して居たくはあったけど、少なくともこれから三年間はあの馬鹿たちと一緒にいられるから。それに、これ以上いたらあたしまで千冬さんの一撃喰らいそうだったからね。

「——とりあえず、昼休みになったら一緒にご飯食べましょ」

「おうっ」

「ああっ」

そんな何気ないやり取りこそが、あたしが日本に帰ってきたこと

を実感させた。

「とりあえず、酒が無いのが寂しい限りだが、ウリ坊の帰国を祝って乾杯っ!!」

「だーかーらーっ、ウリ坊って呼ぶなあっ!!」

「ともかく、鈴が元気そうで何よりだ」

「う、うん、箒もね、一夏共々変わらず馬鹿で安心したわ」

「……おい、あいつと一緒にするな」

約束通り、あたしたちは昼休みになったら集まって、食堂で再会を改めて祝い合った。学生らしく健全に、アルコールなど一滴も入っていないオレンジジュースでの乾杯を交わし、というか絶対一夏の奴酒があったら酒で乾杯しようとしてたわよね。

「ねえねえ一夏、この可愛らしい子紹介してよ」

「そうですね、あなた達の知り合いにしては至極真面目そうな方ですし」

なんか一夏たちも友達増えてるみたいだけど、……どうしてこう、どういつもこいつも胸に駄肉いっぱい付けてるのよ。そのあまりある肉こっちによこせ。

「おう、コイツは凰鈴音。俺と箒の幼馴染だ。まあ気軽にウリ坊と呼んでやりやあい」

「そう、私は更識楯無、このIS学園の生徒会長よ。ちなみにあだ名はエリーって言うの、よろしくねウリ坊ちゃん」

「私はセシリア・オルコット、一組のクラス代表兼イギリスの代表

候補生ですわ」

それぞれ自己紹介してくれたけど、セシリアって奴はともかく楯無って奴、なんか一夏とおんなじ匂いがするわね。早速あたしのことうり坊呼ばわりしてくるし。というかエリーって何なのよ、楯無って名前からどうしてエリーってあだ名が出てくるのかしら。

「ふふつ、気になるって顔してるわね、けど駄目よ、それは私と一夏だけの秘密なんだから」

「べつつにい、気になってなんかいないわよ」

「あらら、可愛い拗ね方しちゃって、ねえ一夏」

「元からこいつはこんな小動物チックだからな。いじられて拗ねてる方が可愛いんだよ」

エリーの肩を引き寄せた一夏は、またそんなことをのたまっている。その様が妙に馴染んでいたから、ちょっとだけむかついた。むう、別に一夏が誰と仲良くなっても構わないけどさ。

「な、オルコット、コイツにはウリ坊ってあだ名がぴったりだろ？」

「クスッ、ええ、確かにそうですわね」

ああもう、箒とセシリアもなんかこっち見てにやけてるし。全員そろって何なのよその生温かい視線はっ。

「あゝっ！！ もう何なのよっ、なんでそんなに微笑ましそうにしてんのよあんたたちはっ！！」

「いや、だって？ お前相変わらず小動物チックで可愛いなって共通認識が構築されただけだろ？」

「まあ、確かにな」

「うんうん、可愛いよ、ウリ坊ちゃん」

「ええ、可愛らしいですわよウリ坊ちゃん」

「うがっっ！！ ウリ坊ウリ坊言っなあっ！！」

ああもうつ、何でこっちは怒り続けているのにあんたたち微笑みっぱなしなのよ。ああそう、そういう対応するのねあんたたち、じゃああたしの実力って奴を見せつけてやろうじゃない。

「あんたたち、今日の放課後アリーナに集合！！　そこであたしの実力を見せつけてやるわっ！！」

「OK、いいぜ」

「はあ、わかったよ」

「了解」

「ええ、期待しておりますわ」

くそう、ここまであたしが怒ってるのに、結局みんなに張り付いた微笑みは消えることはなかった。

「——よく来たわね、あんたたち！！」

「当たり前だろ、面白そうだし」

「……お前に恐怖心を抱けって？　無理言っなよ」

「駄目よお、調べたらウリ坊ちゃんって中国の代表候補生なんだって、だから実力は折り紙付きな筈よ」

「プフツ、国家代表ウリ坊って、また可愛らしいですわね」

うん、こいつらほんとに変わってない。加わった面子も加わるべくして加わったような奴だし、遠慮なんていらないよね。

とりあえずあたしは即座に自分の愛機である<甲龍>を展開して、

巨大な青龍刀二本を連結させた専用武器である＜双天牙月＞を、一番あたしの事をウリ坊呼ばわりしてる一夏に振り下ろした。大気を揺るがす唸りを伴った振り下ろしが、一夏がいた地面を大きく砕く。

「——おいおい、あぶねえな」

うん、やっぱり一夏のことだから、この程度の不意打ちぐらい避けると思ってた。大きく飛びさがった一夏の体は既に＜ラファール・リヴァイブ＞に包まれてて、その両手にはハンドガンが握られている。

「不意打ちなんて喰らう方が間抜け、なんでしょ？」

「おうおう言ってくれるねえ、それでこそ、だ」

ISに乗っていても変わらない出鱈目な曲撃ち。けれども的確な狙いが付けられた弾丸は、つい先ほどまであたしがいた空間を打ち抜いた。

「お？」

「ふん、アンタのへなちよこ玉なんか当たるもんですかつ！！」

「はっ、吠えてろよ」

「それはこっちの台詞っ！！」

あたしは＜双天牙月＞を手首のモーターを急速回転させて、一夏の銃撃を防ぐ楯とした。同時にそのまま突っ込んで一夏の懐へと飛び込む。そこで＜双天牙月＞を分離させて、二刀流へとスタイルを変更する。

「そらそらそら！！」

未だハンドガンを両手に握りしめる一夏に対し、あたしは両手に持ったく双天牙月>を振り回し、多方向からの連撃を放つ。近接格闘において、銃器と刀剣を持った者、どちらが有利かなんて言うまでもないだろう。

「ほらっ、どうしたのよ一夏!!」

「はっ、ぬかしてろっ!!」

いまだ素人と言って差し支えない一夏に対して、あまりにも遠慮がなさすぎると思われるかもしれない。事実一夏は防戦一方、けれど相手は一夏なのだ、これぐらいでちょうどいい。

「ほら、反撃行くぜえ」

こっちの連撃の隙間を縫って、アイツのハンドガンが火を噴いた。その一撃は的確に、今振り下ろさんとしていた右のく双天牙月>の柄元を狙い撃った。狙い澄ましたタイミングで放たれた銃撃は、こっちの連撃に間隙を作る。その隙に一夏は大きく距離をとり、アイツの得手である中距離戦の間合いとなった。

「すげえな、鈴」

「何よいきなり」

「何って、お前一年前まではISなんて縁が無かつただろ？ それで専用機まで与えられて代表候補生にまで上り詰めたのは純粹にすげえと思ったのさ」

「……う」

あの馬鹿に手放してこつちも褒められると調子が狂う。第一あたしが頑張れたのって、アンタと箒に追い付けるようになって思ってたから。

「だから嬉しいのさ、遣り甲斐がある。越えるべき壁があるってのは幸せなのさ」

「ふ……ふんっ、相も変わらずプラス思考よね、アンタって」

「当たり前だ、一回こっきりしかないオレの人生、何でマイナス思考で生きなきゃいけないんだよ」

一夏はずっと、子供のころから何かに向かって生きていた。勉強だったり喧嘩だったりいろいろ。だから、あの一夏にこう言われると、その、なんか、こそばゆく感じるわ。

「つつわけで、今はお前に挑ませてもらうぜ」

「はっ、上等！！」

そんな問答を終えて、再び動き出すあたしと一夏。けれど失念していた、こんな状況でもう一人の幼馴染が黙っている筈ないってことに、

「——ノリノリなのはいいがな、私を忘れるな」

<打鉄>に身を纏った箒が、当然の如く一夏に斬りかかった。だけれど一夏が、よりにもよって箒の不意打ちに反応できないはずがない。神速の早撃ちで箒の斬撃に自身の銃撃を当てた。

近接戦用ブレードと、ハンドガンの弾頭が正面衝突を起こし、箒の斬撃を一夏にまで届かせない。

「おう、ワリイワリイ、鈴の奴に夢中になってた」

「———というか私たちも無視しないでくださいまし！！」

「——そうよねえ、特に一夏、君は私を無視しちゃだめでしょ？」

そこに降り注ぐマシンガンとレーザーの雨。同時にセシリアとエリーのISの情報が、私の視界に映し出される。イギリス製第三世代型IS<ブルー・ティアーズ>と、ロシア製第三世代型IS<ミステリアス・レイディ>。

「とりあえず、過日の借りをかえさせていただきます!!」

言うや否や、<ブルー・ティアーズ>から四つのビットが分離し、一夏へと狙いを定める。一夏はそれを、初心者にしてはまあまあの機動で避け続ける。多分あいつは一对多の喧嘩に明け暮れていたから、機動自体は不慣れでも多方向からの攻撃には慣れているんだろう。でないとおあまで避けられる筈がない。

「一度見た奴が早々通じるかよっ!!」

そして一夏の器用さは半端じゃない。襲いかかるレーザーの雨の隙間を縫って、遠く離れるセシリア自身へと銃撃を撃ちこむ。確か情報じゃあ、イギリスのBT兵装は本体との同時使用はできないという欠陥があったはず。それを本能的に察知した一夏の銃撃は、例え牽制程度でもセシリアの攻撃の手を緩めることに成功していた。

——そしてそこが、私の攻撃チャンス。

<甲龍>の第三世代兵装、空間圧縮による衝撃波を使用した不可視の砲撃、<龍咆>を起動。セシリアの猛攻を切り抜けた一夏へと

放つ。

「グウツ、なんだ今の？」

それでもその不可視の一撃を、直感だけで直撃を避ける一夏は半端じゃない。かすり傷以上直撃未満と言ったところに抑え込んだのには、正直呆れかえる。

「ひ・み・つよ」

そして別に＜龍咆＞はIS本体の機動に何ら影響を及ぼさないから、私はあいつでも一朝一夕に真似できないほどに磨きぬいた機動を行使しながら、＜龍咆＞を撃ちまくる。

反撃を許さぬ一方的な連射。それでもあたしは手を一切緩めることなく撃ち続ける。だってあいつは一夏だから、どんな状況にあっても諦めるなんてしないだろう。その証拠に、アイツの目には今もなお溢れんばかりの闘志が爛々と輝いている。

「――試してみるか」

砲撃の隙間、そこに放たれる銃撃、けれど銃口から読み取れる弾道予測にあたしの体は重なっていない。目晦ましの乱れ撃ち？　そう判断したあたしの真横で、銃弾が弾かれる音が響いた。

「え？」

そこにいたのは一夏が放ったであろう銃弾を弾き飛ばした筈の姿けれどおかしい、さっきのアイツの銃撃に直撃コースなんて一切な

かった筈、それに何より、どうして真正面から放たれた銃弾が、私の真横から襲いかかるのか。

「さっすが一夏、ほれなおしちゃう」

「気に入ってくれたかよエリー？ オレの大道芸」

「勿論、銃弾のビリヤードなんてお目にかかれるとは思わなかった」

エリーのその言葉で、あたしは一夏の行為の詳細に気がついた。アイツは銃弾同士ぶつけ合わせて、弾道を曲げてあたしの真横から襲いかからせたのだ。

「オレはな、オレにしかできないことをやってみたい。ISとオレ、どちらが欠けてもできないことをやって見せてこそ、オレはISに使われるんじゃないくて、ISを使ってるって証になる」

そんな心底子供の意地みたいなことをのたまう一夏。けれどそれは、真っ当過ぎるほどに正論で、無茶苦茶アイツらしかった。

「だろうな、お前ならそういう馬鹿をやりそうだった」

そして筈は、アイツがそれほどの馬鹿だつてのを、誰よりも深く理解していたからこそ、真っ先にあんな曲芸に対応できた。正直言つて、その仲の良さに嫉妬しそうだった。

「はっ、言ってくれるな、筈！！」

「ぬかせよ一夏！！」

そして再び放たれる銃弾のビリヤード。ISの演算能力と一夏の

積み重ねた経験と出鱈目な技量が成し遂げるそれを、箒は刀一本を頼りに切り払い続ける。

当然そんなに打ち続けていれば、ハンドガンなんてすぐに弾切れになってしまふけど、一夏は即座に新しい弾倉を量子展開して弾幕を途切れさせない。

どうやらISに乗ったとしても、一夏と箒は互いを一番の敵だと認識しているらしい。正直言ってかなりむかついた。浮かれまくっているあいつらを横つつらからひっぱたこう。

<龍咆>は空間圧縮による武器だ。だからまずは圧縮率を最大限にして、一夏の銃弾ビリヤードを無茶苦茶にする。勿論距離があればある程空間の歪みは極小の物になっていくけど、アイツのあの芸当は出鱈目なように見えて、精緻極まる照準があつてこそ、たとえ僅かな歪みでも、アイツのビリヤードを崩すには十分だ。

「うおっ!?!」

そしてそれは同時に、<龍咆>のチャージが最大限に完了しているという事、そのまま不可視の砲撃を、今度は箒に向けて放った。

「ぐうつ!!」

どうよ、今のあたしはあんたたちにとっても脅威なのよ。これからは置いてきぼりにさせないわよ。

「やるじゃねえか、鈴!!」

「中々外道に染まってきたな、お前も」

「うつさいっ!! 誰のせいだ誰のっ!!」

「おい箒、お前のせいだつてよ」

「お前のせいだろうが、一夏」

「二人ともじゃあっ!!」

「……子供の喧嘩と変わりありませんわね、このノリは」

「でも面白そうでしょ？ セシリアちゃん」

「ええ、そうですね、——それに私たちが蚊帳の外にするとはいい度胸だと、思い知らせてあげましょう！！」

「同く感、私達除け者にして盛り上がってくれちゃってさ、こんないい女を袖にするなんて、これは罰が必要よね」

「ええ、とびきり痛いのを差し上げましょう」

それからずっと、アリーナの使用時間ぎりぎりまでISを使った喧嘩にあたしたちは明け暮れた。

「——自主的な学習は確かに推奨すべきではあるがな、限度をわきまえるこの馬鹿共が」

まあそれが白熱しすぎちゃってね。あたしたちが使ったアリーナは数日間使用禁止になっちゃった。そりゃあ確かに地面はクレーターだらけだし、壁は至るところ罅割れてたしね。

「これからは自重しろ。出来んというならばこれからは私がお前らの相手をしてやる」

そうして千冬さんから全員に拳骨が見舞われて、あたしたちは全員そろって悶絶しちゃった。

うん、本当に痛いわ、千冬さんの拳骨。

第三話（後書き）

<あとがき>

この一夏、基本的に拳銃だけで戦うのですが、それだと話的に決め手に欠けるというか、インパクトが無いというか、ならどうしようかと頭を捻ったところ、「ジューダスにしてみえはいんじやね?」という電波が舞い降りてきました。そのうちきつと「レスト・イン・ピース」とかい出しそうではあります。

第四話

オレにとって、起点というのはやはりISの登場だったのだろう。姉貴とその親友が作り上げ世に出した規格外の兵器。最強無敵、そんな陳腐な四文字が的確な表現の、いかれたスペックの超兵器。

しかもなぜか女にしか使えないという、わけのわからん欠陥を備えもしていた。別にそのこと自体はどうでもいい。

数がたったの476機しかなくとも、それが世界の戦力バランスを担うことになったのも、それら皆全て別にどうでもいいものだ。確かに、あんな出鱈目な物作ったせいで、俺と箒が離れ離れになりかけたが、それも少し抗った程度で無しにできた。監視対象なんて一か所に固まっていたほうがいいだろ、と姉貴に訴えて、結果、箒は俺達の家に住むようになった。

正直言って、そうしていなければ俺はどうなっていたかわからない。なぜなら、その頃からちよつとずつ、世間という物が変わっていったから。

—— ISがあるから女は強い。女は偉い。だから男は女より弱い。女より下だ。

そんな考えはちよつとずつ、少しずつ、世の中という奴を侵食していった。おまけにウチの姉貴が、全国ネットどころか全世界レベルで活躍してしまった。もとよりバグキャラじみていた姉貴は、瞬く間に世界から脚光を浴びる存在となった。

もしこれでISが男性にも操縦できる存在ならば、“織斑千冬”が強いのだと至極当たり前の評価となったのだが、結果それは女性優位の狂った思考を助長させる一因となった。

「男が粹がつてんじゃないわよ!!」

「弱い男のくせに」

そんなことをのたまう女性が世に増えて、そういう奴らを見るたびに心底からの吐き気を催した。どうしてそんなことを己の口から吐き出せるのかと、理解に苦しんだ。

相手の欠点を突いて蔑むのはまあ、許容はできなくとも理解はできる。相手の粗を突いて、自分は優越感に浸りたい。下衆だが一応の理屈は通る感情だ。

けど、“コレ”は違うだろう。

自分は女だから、女である時点で男より偉い。そんな物に理屈なんてあるわけない。

ISが使える？ それはISが強くて、実際にISに乗ってる奴が強いと自負するのならわかる。女が強いんじゃない、ISが強いんだ。

つまりは女だから強いんだとのたまう奴らは、相手も、当の自分すら見ていない。筋の通らぬ自己愛によって、自分は強い。自分は偉いと砂上の楼閣で空しい哄笑に浸る。

そんな奴らが、俺にはどうしても人間に見えなかった。己には見えぬ何かを頼りに、あやふやで空っぽな自負に酔う連中。木偶人形。そんな奴らはそう呼ぶのが最適だろう。

そんな奴らを見るたび思うのだ。人間ってのはそうじゃないだろうと。確かに世の流れに流されることもあるだろう、けど、いつかは自分の足で流されずに立てる奴が人間だ。

——だから俺は、真面目に生きていない奴を認めない。

けれど、あの織斑千冬の弟という立場は、そういう真面目に生きていない奴らをたくさん引き寄せていった。どいつもこいつも目が曇っている奴らばかり、そんな奴らに辟易していても—— 箒だけは違っていた。

周りからは剣術馬鹿だのなんだの揶揄されていても、アイツは自分のやりたいことをやっていた。流されずに自分の足で立っている。そんなアイツが、オレの目には眩しく光り輝いているように見えた。アイツのダチであることが心底誇らしかった。故に、アイツとの勝負は心が躍る。全霊を賭して戦って、それでもなおアイツは俺と拮抗する。アイツがいる限り、オレは前に進み続けると実感できた。

——まあそんな事、口が裂けてもアイツには言えないがな。

今日も今日とて、いつものメンバーが集まって行われた、放課後の喧嘩じみた模擬戦が終わり、一夏を除く面々は大浴場で汗を流していた。

「チッ、今日も引き分けか」

湯気立ち上る湯船の中で、箒の苦渋に満ちた呟きが漏れる。その顔と体にはいくつも痣が付いており、今日の模擬戦が一段と激しかったことを如実に表していた。

「……………相変わらずよね、アンタと一夏って」

何せ今日の模擬戦の顛末は互いに武器を破壊され、弾き飛ばされた二人による、ISを使つての殴り合い。量産機とはいえスラストの出力とパワーアシストを乗せての殴り合いは、こうして互いの体に痛々しいほどの痣を残していた。

しかしそれは、一夏と箒にとってはいつもの事。それを一番よく知っている鈴にしてみれば、ああまたいつものオチかという感想しか持てない。ちなみに今日は、互いに渾身の右ストレートによるクロスカウンター、そこからのダブルノックアウトという顛末だ。

「相変わらずということとは……………これまでも？」

「うんそう、箒と一夏って事あるごとに勝負するし、その時は箒が鉄芯入りの木刀で、一夏の馬鹿はどっからか手に入れてきた実物の銃使ってたね」

鈴が平然と言った言葉の内容に、セシリアの整った柳眉が歪む。はつきり言つてそれは勝負という言葉の内容からあまりにもかけ離れたもので、とてもではないが許容できるものではない。

「正気ですの？」

「馬鹿だから正気じゃないんですよ？ 何せ箒ときたら模擬戦用のプラスチック弾頭を平然と木刀で弾き飛ばすもの。はつきり言つて馬鹿よ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うな、ウリ坊」

「いや、私も鈴ちゃんの言葉に同意するわ」

「……………エリーもか」

「私事です、もう一度言いますけど正気ですの？」

「……………ふん」

周囲からの総攻撃に、箒は膝を抱えて口元まで湯船に沈む。口から漏れる空気の泡が、箒の不満を表しているようだった。

「というか、お二人はどうしてあそこまで戦うのですか？」

セシリアの疑問は当然のことだろう。二人のそれは最早模擬戦や喧嘩などという言葉の範疇に収まるものではない。殺し合い、と評していいほどに苛烈で白熱した物だ。

「――別に、ただアイツに負けたくないだけだよ」

けれど、箒と一夏の当人同士にしてみれば、その一言だけで説明が付くし納得できる。真実二人の間にあるのはそんな単純化された感情で、その奥底にあるのを説明付けられるのは、この二人をずっとそばで見続けてきた者だけだろう。

「ま、単純に言えばそうだけど、負けないってのは先に立っているってことで、そうすれば片方も必ず追いつがってくる、負けたくないってのはつまり、二人で一緒に先へ進みたいってことの表れなのよ」

そう、鈴はこの二人をずっとそばで見続けてきたのだ。だからわかる、この二人の負けたくないは自分の為でもあるけれど、互いの為でもあるのだと。お前はここで終わる奴じゃないだろう、だから俺／私が先に進んでやるから追い付いてこいよ、そんなあまりに馬鹿らしい思いを、二人は懸命に抱き続けているのだ。

「プツ……ククツ……」

「あはっ、あははははっ！！」

そんな事を聞かされては、セシリアとエリーが笑うのも当然だ。高校生になってまで、そんな子供の様な気持ちを懸命に抱き続けているなんて、なんておかしくて、馬鹿らしくて、そして――

――素晴らしいだろう。

ああ、ならばあれほど二人の戦いに熱が籠るのも納得できようという物だ。それぐらいの愚かしくも輝く思いでなければ、人はあれだけ懸命になりはしないだろう。

「成程、二人は親友なんだね」

「そうですね、その言葉こそがぴったります」

得心がいったと、そんな表情を浮かべるセシリアとエリー。二人の心中にあるのは、そんな関係を結んでいる二人への賛辞と羨望だ。恋愛感情などという言葉では結べない、苛烈で傷だらけの物ではあるけれど、そんな思いを結び合える存在がいることにかけて値なしの祝福を送りたいとすら思える。

「……………勝手に言ってる」

そして篝の顔が真っ赤に茹だっているのは、きっと湯船の温かさだけではないのだろう。

「そういえば当の一夏さんはどうしているのかしら？」

セシリアが会話に上り続けていた一夏の現状を気に欠ける。学園唯一の男子生徒であるが故に、当然大浴場での入浴許可など下りはない一夏は、模擬戦が終わった後ふらりと姿を消してしまった。

その一夏の行動は、基本的に毎日がそうであり、セシリアは常から彼のそんな行動が気にかかっていた。

「……知るか、そんなこと」

その問いに篤はそっけなく答える。しかしその様子には、何故か欺瞞が含まれている様に気がしていた。しかし、篤の様子からしてそれ以上は答えることはないだろうと、セシリアはあたりを付ける。

「ああ、一つ言ってあげるわセシリア、アイツはね、古臭いのよ」

代わりにその疑問に答えたのは鈴だ。その中に含まれていた古臭いという単語が気に掛かり、セシリアはそれをオウム返しに口にする。

「古臭い？」

「そう、アイツはかつこつけだからね、女の子の前ではカッコ悪いところ見せたがらないのよ。アンタみたいに誰かの目がある所じゃ、見栄張りたがるタイプなの」

一夏は真面目だ。素行とか外見などではなく、物事に対する姿勢が真面目だ。そんな彼が、自らが強くなるのをただ口を開けて阿呆の様に待っているだろうか。

そんなことは、例えば天地がひっくり返ろうともありえない。織斑一夏は座して待つだけの人間ではない。求める物を自らの足で進んで勝ちとりに行く人間だろう。

「成程——見栄張りですわね」

最早セシリアの心情に、一夏への嫌悪感などない。その見栄っ張

りで意地っ張りな人格に、混じりけなしの好感を得られるぐらいには。

「そういうところがいいんじゃない。カッコいいじゃん」

エリーは勿論、一夏のそういうところを知っている。彼のそういうところが心底気に入ったのだから。

——アリーナの中で、未だ動く機影があつた。

一夏の駆るくらファール・リヴアイブが、初歩的な機動を幾度も幾度も繰り返している。急加速・急上昇・急下降・急旋回、教本通りの初歩的な機動を、丁寧に丁寧に繰り返し、それをひたすらにやり続けていく。

常の一夏からは想像もつかない、それは地味と言える光景だった。時に制御を誤り、頭の中に描いた機動とかけ離れば、それをアリーナの監視カメラで確認し、客観的な視点からどこにミスがあつたのかを事細かに確認する。

そしてまた失敗した機動を繰り返していく。体力よりも精神力を削っていく、明確な進展も何も無い練習を、一夏は無表情で黙々と繰り返していく。

「…………ふう」

そうしてアリーナの使用時間ぎりぎりまで自主練習を行い、少しでもISという兵器の操縦に習熟していく。

最大速度から地面から一センチの距離での急停止をやれば、時に

は地面と痛烈なキスをし、より鋭角な急旋回を行おうとすれば、間接に鈍痛を走らせる。それらの痛みは一夏にとつての糧であり、決して避けては通れない物だった。

もとより知識面では一般入学でこのIS学園に入ったどの生徒よりも、一夏は劣るだろう。男であるが故に、ISに関しての勉強など全くやったことはない。そんな自分が彼女たちに追い付こうと思ったら、それはもう男だからこそできる痩せ我慢で、必死こいて追い付くしかないだろう。

おまけに量産型とはいえ、自分だけの機体もある。そんな物を押し付けられたとはいえ、それを無為に腐らせるのは、一夏にとって我慢ならないことだった。

全く不満のない人生なんて、女子供の夢物語にしかないだろう。ならばそう、気に入らないことがあってもそれを飲み干して、足掻いて、前に進み続けることが人生だろう。

(……飢えや不満なんて、人生に付き物だろうが)

だからこそ、普段は悪態ばかりついて居る千冬に対して頭を下げ、アリーナの使用時間を延長してもらい、できる限り自らを追いつ込む。他の誰かはもう通った道だと自分を叱咤し、無様であろうとも練習を黙々と続ける。

それなりとはいえ、素人同然の機動を行い続ける一夏の姿は、確かに無様と言えるだろう。それでも、そうして積み重ねていく修練は、決して一夏を裏切りはしない。必ず一夏の血肉となって、いつか花咲く日もあるはずだ。

——それになりより、一夏のその姿は真面目と、そう呼ぶにふ

さわしい姿だった。

常日頃一夏が自負する「真面目に生きている」という言葉に違わぬ姿。

「頑張ってるね、色男」

「——なんだ、エリーかよ」

最初に出会った時には気付いた自分の隠行に、全く気付かないほど没頭していた一夏。

「ほら、喉渴いてるでしょ？」

「……おう、サンキュ」

常日頃叩く軽口も鳴りを潜め、一夏はエリーから投げ渡されたスポーツドリンクをどうにかキャッチする。既に満足に体を動かすだけの体力もないのか、表情だけはどうか平静を保っているものの、そのおぼつかない手つきが一夏の消耗ぶりを如実に表していた。

そういうところを晒してしまったことが一夏の表情を、苦虫を噛み潰したようなものに変え、それをエリーは愛おしそうに見つめている。

「——チッ」

「拗ねない拗ねない、いいじゃない、そういうところを見られたってさ」

舌うち一つこぼした一夏は、場を誤魔化すかのようにスポーツ

リンクを一気飲みする。ゴクリゴクリと喉仏が動き、過度の練習で失った水分を急速補充する。

「やっぱりさ、こういうところは見られなくなかった？」

「当たり前だろ？ 男はいつの時代もカッコ付けばかりなのさ」

「でもさ、ウリ坊ちゃんや篝ちゃんは気付いているみたいだよ」

「それでも気付かないふりしてくれるあたり、アイツ等っていい女だと思うぜ」

「じゃあ私は悪い女かしら」

そう言ってニヤリと笑うエリーの表情は、確かに悪い女の、魔性というべき笑みだった。

それを見て一瞬、一夏の表情に思案の色が浮かぶ。さてどうしたものか、先程までの姿を見られて、このままずるとペースを握られ続けるのはしゃくだと、いつもの様に無駄な負けん気を発揮して、一夏は悪戯を考えている時の様に思考を加速させた。

「そうだよな、人の懐にずかずか上がり込んで、こうなりやお前の奥底も見ないと釣り合い取れないな、————ベッドの中で、とか」

ニヤリと、これまたエリーと同じように性質の悪そうな笑みを浮かべて、一夏はエリーに詰め寄った。

「あら、積極的ね」

「いけないかい？ いい女がいるのに手を出さないってのは、逆に失礼だと思っただがね」

「それじゃあ篝ちゃんは？ ウリ坊ちゃんは？ あの子たちもいい女なんですよ」

「ああ確かにそうだけど、篝でオレの息子おっ勃てる自信ないし、

ウリ坊は色気より可愛さが先に来るだろ、そういうふうには見れねえよ」

「酷い言い方、悪い男ね」

互いにかわす、ともすれば下品ととられかねない言葉の応酬だったが、それでも互いに奥底の心理を理解しているために、決定的にそういう結果にいきつくための色気が不足していた。

「——駄目だな」

「——駄目ね」

つまりは、三文芝居では雰囲気を作れないということだった。双方共に笑みを消し、疲れたように溜息交じりの否定の言葉を吐き出した。

「今日はもう限界かね、これは」

「そうねえ、ベッドの中で本当に寝た方がいいわよ」

「だよなあ、このまま突入しても絶対勃たねえ。それは男として恥ずかしすぎる」

「アリーナの施錠は私がしておくからさ、今日はもう帰っちゃいなさい」

「あゝあ、つくづくカッコ悪い」

「そうかしら、決めるべき時にカッコよく決めれる奴が、本当に力ツコよくてイイ男だと思うけど」

「——前言撤回、やっぱお前イイ女だわ」

「今頃気づいた？」

「いいや、そんなの最初っから気付いてた。………それじゃあ悪いけど後頼むわ」

「ええ、おやすみ一夏」

「ああ、おやすみ、エリー」

交わす別れの挨拶。同時に一夏の顔がエリーの顔に急接近した。吐息がかかるなんてものではなく、ほんの僅か零になる二人の距離。キスとすらいえない、ほんの僅かの接触をエリーの頬に残し、今度こそ一夏はアリーナから出ていった。

「じゃあ今度こそ——おやすみ、エリー」

三文芝居で気が抜けて完全に無防備になったエリーへの、それは一夏の完全な不意打ちだった。

そういう雰囲気でこういうことをやられても、エリーは決して動揺しないだろう。そんな状況ならば、来ることが分かっているなら、エリーは自分のプライドにかけて無様に動揺なんてしないだろう。

だからこそ、そういった警戒をはぎ取ったところに打ち込まれたこの不意打ちは、エリーの精神を完全に動揺させた。

「.....え？」

そんな呟きですら、発することができたのはアリーナから一夏の姿が消えた後。未だ頬に一夏の唇の感触が残っている様な気がして、エリーは思わず自分の頬を撫でた。

ようやくそこで、自分が一夏にキスされたことを自覚したエリーは、ついでに頬を撫でる自分の掌に熱いものが当たっている感触も自覚した。

「私、キスされちゃった？」

言葉にすれば、一層掌に伝わる温度が上がったような気がした。普段の飄々とした雰囲気からは想像もつかない、恋に疎い一人の少女の姿を晒し、それを自覚してしまう自分に一層エリーは混乱する。

「い……一夏の馬鹿」

誰もいなくなったアリーナで、一人寂しくそう呟くのはあまりにも間抜けだったが、今のエリーはそれぐらいしかできなかった。きつと一夏はこんな自分を想像していたのだろうと思うと、今手元にハンカチがあれば噛みちぎりそうなほどに悔しかった。

「こつちが、年上なんだよ？」

女のプライドとして、年下の男の子にこうまで手玉に取られると、混乱が収まってくれば悔しさが真っ先にこみあげてくる。

「あゝでも、今更どうこうしに行くのもなあ……」

そんなことをすれば余計に手玉に取られる予想しかできない。「何だエリー？ あれぐらいのキスで動揺するなんて結構初心なんだな」とか、「あれぐらいじゃ満足できないってか？ いいぜ、今のお前ならその気になれそうだ」とかのたまう一夏が、エリーの脳内で鮮明に再生される。

「あゝもっつ！！ 一夏の馬鹿っ！！」

一度罅が入った心はそんな想像だけでも揺さぶられ、エリーはその動揺を吹き飛ばす様に今一度、大声で一夏を罵った。

『何だ、可愛いところもあるんじゃないかねえかエリー』

そこにちょうど、アリーナの館内放送から一夏の嗜虐心に満ちた声が響く。恐らく、あのまま帰るふりをしてアリーナの管制室に忍び込み、エリーの痴態をニヤニヤと眺めていたのだろう。

「……………え？」

先ほどキスされた時の様に長い沈黙の後に絞り出した呟きが、再びエリー一人だけがいるアリーナに流れた。

「見てた？」

『勿論』

「…………一夏の馬鹿、乙女のあられもないところ覗き見るなんて」

『お前だって俺のカッコ悪いところ見ただろ？　これでチャラだよ』

「一夏のエッチ」

『思春期の男なんて皆そんなもんだろ？』

「一夏の馬鹿」

『おう、よく言われる』

「一夏の変態」

『うわ、ひっでえ』

ああダメだ、とエリーは痛感した。既にピースは一夏の物、これ以上何をどう言ってもこのピースを崩せそうになかった。

「ふん、さっさと自分の部屋に帰って寝なさいよ」

「おう、お前の可愛い姿も十分堪能したしな、今度こそおやすみエリー」

「……………おやすみ一夏」

その応酬を最後にあっさりと一夏はマイクを切り、今度こそアリーナにはエリー一人となった。

「今度何かあったら、絶対私がペースを握ってやるんだから」

アリーナの中心で気炎を燃やすエリー。まあしかし、その姿も一夏がみれば可愛らしいとしか映らないものであった。

第四話（後書き）

<あとがき>

きつと司狼って本質的には努力家だと思うんですよ。けれど何でもできたし、できてしまったからそんなことすらできなくて、だからこの世界では、女連中に見られないところで努力してるって感じですよ。まあ、そんなの周りにはばれねえんですけど。

第五話

とある日の昼食時の食堂で、いつもの面子が集まってだべっているその時に、エリーがおもむろに一枚の紙を取り出した。

「じゃ〜ん！！ これはいったい何でしょう？」

そう言っ出された紙を、全員が食い入るように見つめる。――
箒だけは「別にどうでもいい」みたいな雰囲気を出していたが、それでも気になる様で視線だけはその紙に釘付けだ。そして鈴がそんな箒の様子を目敏く見つけドヤ顔を晒し、常より増して仏頂面になった箒にデコピンを喰らうところまで、実にスムーズな流れを展開する。

「――てい」

「ぶぎゃっ！？ 何すんのよ！！」

「お前がこつちを見てドヤ顔しているからだろっが」

「アンタが無関心なふりしてチロチロ見てるから仕方が無いじゃないっ！！」

デコピンのせいで赤い斑点ができた額を抑え、憤怒の表情で箒に喰いかかる鈴。

実にくだらなく、微笑ましいやり取りを交わす二人に、他の面子どころかその場にいた他の生徒ですら生温かい視線を二人に、というか鈴に集中して注いでいた。

周りから聞こえる含み笑いに、ようやく鈴も自信が注目の的だと自覚し、そこから赤熱化&暴走のコンボを発動させる。

「うがぁっ！！ アンタのせいだこらぁっ！！」

「お前がハイテンションで暴れてるからだろ？ 流石ウリ坊」

「ウリ坊って言うなっ！！」

涙目で箒に詰め寄る鈴。しかしその光景に悲痛感などなく、何処まで行っても微笑ましさしかなかった。一夏に至っては「後はぐるぐるパンチしたら完璧だな」とか思っている程だ。

「第一あんたらがウリ坊ウリ坊って言いまくるから、クラスの皆にもウリ坊って言われてるのよ。責任取りなさいっ！！」

「皆ウリ坊がぴったりだと感じたからじゃないのか？」

「ちゝがゝうゝのゝっ！！ アンタたちのせいなのっ！！」

そんなやり取りを交わす箒と鈴を尻目に、セシリアが笑いをこらえながら自身の携帯端末から一枚の画像ファイルを展開させる。

「私のルームメイトがウリ坊ちゃんと同じ二組の所属で、ついでに漫画研究部に所属しておりますの」

もう我慢の限界と言わんばかりに震える手で、タッチパネルを操作して展開された画像には、二頭身にデフォルメ化された鈴が、可愛らしいウリ坊の着ぐるみを着込んでいるイラストだった。大きく口を開けたウリ坊の口から、鈴の可愛い顔とツインテールがぴよぴよと出ている。

「は……初めて見たとき……もうお腹が張り裂けそうでしたわ…プツ……ククツ」

「あはははっ！！ 最高っ！！ これ描いた人いいセンスしてるわっ……」

「だな、正しくウリ坊じゃねえか。クククッ」

「ちなみにこれを描いたクラスの応援旗を作ろうという話が、持ち上がっているとかいないとか」

「いやあ、これは作るべきでしょ」

「生徒会で正式に認可してやれよエリー。権力つてのはこういう時に使うもんだ」

「そうよね、権力つてのは的確に正しく使わなきゃね」

「何処が正しくて的確なんじゃああああっ！！」

ようやくセシリアが持ち出した画像に気が付いた鈴が、エリーと一夏のやり取りで更にブチ切れた。

「だいたいどこのどいつよ、こんなイラスト描いたのっ！！」

「お前のファンじゃねえの？ 愛されてるって証だろ？」

「こんな愛いらない、絶対いらない。というかこんなイラストの応援旗で応援されたら死ぬるわよっ！！」

「ねえ、セシリアちゃん、この画像コピーさせてちょうだい？ 今日でも画像アップロードサイトに上げるから」

「それには及びませんわ。昨日すでに上げました。喜んでくださいウリ坊ちゃん、すごいアクセス数ですよ？」

「喜べるかあああああっ！！」

最早放っておいたらどこまでも過熱しそうなほどに鈴はブチ切れていた。

「そっぴやエリーが持てきた紙切れって何だったんだ？」

そしてそんな鈴を華麗にスルーして、箒がエリーの提示した本題に目を向けた。もう惚れ惚れするぐらいのスルーっぷりだ。長年の友達付き合いの成せる職人技であった。

「何元凶がスルーしとんじゃこらああああっ!!」

「何って、私たちのせいで話が脱線しただろ？ 話の本筋に戻すのは人として最低限の礼儀だろう」

「ねえ、それなら私は？ 私への礼儀は？」

「さうて、なに書いてあるのかな、つと」

「聞いてんのかああああっ!!」

「お前さすがにうるさすぎるぞ、公共の場所じゃ節度を守らないといけないだろ？ ん？」

実に平然と、呆れ顔でそんなことをたまう箒に、鈴の額に井桁がいくつも浮かび上がる。

「殴っていい？ ねえ、アンタのその顔本気で殴っていいよね」

「だから落ち着けて、ここはお前だけの場所じゃないんだぞ？」

「うえゝんセシリアゝ、箒がいじめるゝっ!!」

ついにあらゆる面で我慢の限界を迎えたのか、鈴はマジ泣きしながらセシリアの胸に顔をうずめて泣きじゃくる。何処からどう見てもそれは幼い子供のそれであり、泣き継られたセシリアも慈愛の笑みを浮かべて鈴の頭を撫でてあやし始める。

「よしよし、もう大丈夫ですからね鈴ちゃん」

「ひつく…………ぐすつ…………箒の馬鹿あ…………」

「ええ、箒さんが馬鹿なのは初めからわかってるでしょう？」

「…………おいこら、何を言っているんだセシリア」

「可愛さ余ってお友達をここまでいじめるのは馬鹿以外の何物でもないでしょうに」

「ぐっ…………」

鈴をあやしなから、まるで子供の集まりの面倒をみる年上のお姉さんの様な雰囲気で、セシリアは箒をやり込める。

箒としてもちよつとばかりやり過ぎたかな、と心中で反省らしきものをしていたので、セシリアの物言いに反論もせずに黙りこむ。

「鈴さんも箒さんと一夏さんが馬鹿なのは周知のことでしょう？
だったら鈴さんがしつかりしないと」

「うん……わかった……」

ようやく鈴も落ち着いてきたのか、泣きはらした顔をセシリアの豊満な乳房から上げ、自分の腕で残った涙をぬぐい取る。拭い去った後にあるのは、いつものように澁刺とした笑顔。

「ああもう、箒なんか泣かされるなんてどうかしてたわ」

「ええ、そうです。むしろ箒さんを泣かしてしまいなさいな」

「……ふん、お前如きに泣かされるか」

「とか言いつつ、ウリ坊ちゃんが元気になって喜んでるんでしょう
箒ちゃんは」

「うるさいぞ。黙れエリー」

「キヤ、箒ちゃんのツンデレ最高」

どうやら箒はエリーのからかいには耐えることができても、一夏からのからかいに耐えることはできなかったようだ。何処から取り出した木刀を振りかぶり――。

「――公共の場所で暴れちゃだめでしょ？」

一夏の頭に振り下ろす直前、横合いから放たれた鈴の言葉に、そ

の動きを止めざるを得なかった。

「……お前が言うか？」

「あたしだから言うのよ」

「うっわ間抜け、さっき自分が言った言葉でやり込められてるよ、カッコワリィ」

「——それでこの紙なんだけどね」

「……ものすごい平然と話を変えますわね、エリー」

「いやあ、だってこのへんで切り変えないと延々とこんな漫才やってそうじゃない？ この三人は」

「オレも入ってんのかよ、エリー」

「もち」

「はあ、それで？ この紙はいつたい何なんです？」

ようやく話の本題を切り出せることに、エリーは満足げな笑みを浮かべて、取り出した紙の内容を口にした。

「これは近々行われる学年別クラスリーグマッチのトーナメント表よ」

そのエリーの言葉にセシリアと鈴の目の色が変わる。何せセシリアは一組のクラス代表。そして鈴は途中入学とはいえその実力の高さから、既に二組のクラス代表になっている。

つまりは二人ともがリーグマッチの出場者であり、目の色を変えるほどに気にするのは当然のことだろう。

「それで？」

「どういう組み合わせになりましたの？」

当然の疑問を口にする二人だが、内心は既に第一試合の組み合わせ

せにある程度の予想を付けている。

「当然、第一試合の組み合わせは一組対二組、セシリアちゃん対ウリ坊ちゃんよ」

何せ互いが専用機持ち、しかも双方共に第三世代型の最新鋭機を専用機としている。基本的にIS学園のこうした試合は生徒の技量の確認もあるが、最も重視されるのはさまざまな組織の諜報合戦だ。目を付けるに値する優秀な操縦者はいるか、あの機体の機能・性能はどれほどのものか、そういった物の探り合い。女尊男卑の世の中にあるうとも生き続けている古狸の化かし合いだ。

ならばそんな状況下で、中国とイギリスの第三世代機同士をぶつけ合わないなど許される筈がない。何せ相手がただの学生且つ量産機だと、満足なデータを得られないかもしれないのだ。そのためにもこの組み合わせでないと困る。でなければ学園当てに「公正な試合の組み合わせを求める」という一文が判を揃えた様に送られる筈だ。

「まっ、順当よね」

「ええ、想定通りですわ」

故に双方共に驚きはない。しかも毎日の模擬戦で互いの手の内は知れ渡っている。勿論奥の手がある可能性はあるが、そんなもので気後れするほど二人の心胆は細くない。

「負けないわよ、セシリアっ!!」

「それはこちらの台詞ですわ。鈴さんっ!!」

だから互いに闘志を燃やし、遠くない未来での奮戦と己が勝利を誓いあう。それは実に青臭く、実に真つ当な、見る者を心地よくさせる好敵手の関係だ。

まるでそう、どこぞの真面目な悪餓鬼と、男勝りの負けず嫌いを彷彿とさせる様な、輝きすら感じさせるような光景だった。

鈴はこれまで、どこぞの二人の関係を見守りながら、それでもそこには入れなかった。友達だと胸を張って言えたが、ライバルだとはいえなかった。

セシリアにとっても、代表候補生という地位まで上り詰めるための戦いの毎日だったが、しかし、勝たなければいけないとは思っても勝ちたいと思った相手はいなかった。

そんな二人が、一夏と箒の関係に羨望にも似た憧れを抱いてきた二人が手に入れた、心地よい敵手の関係。

「ノリノリだねえ、二人とも。——ねえ一夏？ 箒ちゃん？」

「——チッ」

「——フン」

まるで鏡映しの自分たちを見せられているような感覚に陥った一夏と箒が、照れくさを隠す様にそっぽを向くぐらいには、今のセシリアと鈴は光り輝いていた。

「ほんと、可愛いよね皆」

そんな四人を見つめるエリーの表情には、微かな寂寥感が滲んだ微笑みがうつっていた。

「やっぱり友達って、いいものだよね」

「……まあな」

「当たり前だろ？」

「いまさら何言ってるのよ」

「ええ、ここに来てよかったですわ」

反応は様々、それでも全員が揺ぎ無い肯定を返したのだった。打てば響くと言えるようなその即座の反応は、全員に繋がった絆の証なのだろう。

「ねえ、——賭けをしない？」

全員照れくささからか、少しばかりしんみりとした空気を吹き払うように、エリーが務めて明るくそう言った。

「……賭け？」「……」

流石にそんな言葉を、いくらエリーとはいえ吐くのは予想外だったのか、全員がそろってそう聞き返した。

「そう、賭け。今度のリーグマッチでセシリアちゃんとウリ坊ちゃんのどっちが勝つかの賭け」

「いいのかよエリー、一応お前IS学園の生徒会長だろ？」

「いいわよ、ぶっちゃけて言つとここの教師連中もこっそりとやってるしね。まあでも私たちは健全に、ここの食券でも賭けましょうか」

「賭けに健全も糞もあるのか？」

「あら、箒ちゃんはやらないの？」

「一応私は空気を読めるほうだと思ってるんだよ」

「相変わらずヒネてんなあ、箒は」

「……うつさい」

「やりたいならやりたいって言えばいいんだよ、素直じゃないと人生損するぜ？」

「ああはいはい、わかったよやりたいって言えばいいんだろ？ やりたいよ私もっ！！」

一夏の忠言なのか、からかいなのかわからない言葉の前に箒も陥落し、大声で明確に賭けの参加を口にした。

「それで？ 二人はどっちに賭ける？」

言質をとったエリーが、一夏と箒にどちらに賭けるのかを聞いて、セシリアと鈴は少し緊張した面持ちで、固唾をのんで二人の選択を聞く態勢をとった。

「……………」

「……………」

恐らくは即答するだろうという三人の予想を裏切って、一夏と箒は少しばかりの沈黙の後、賭ける対象を口にした。

「——セシリアに食券十枚」

まずは箒がそう答え——。

「おいおい箒、同じ方に賭けたら賭けにならないだろ？ オレもセシリアに賭けるつもりだったんだぜ？」

つまりは、双方共にセシリアの勝利に賭けたのだ。セシリアとしては、二人は鈴に賭けるだろうなと予想していたので、外れた予想

に僅かな驚愕の表情を見せた。

やはり友達として長い付き合いである鈴に、応援の意味も込めて鈴の勝利に賭けるだろう、と。

別に非はないが、それでも少しばかりの後ろめたさを顔に滲ませて、セシリアは鈴の方へと視線を向けた。

「――ふふん」

ドヤ顔だった。それはもう見事なドヤ顔を鈴は晒していた。セシリアですらがその小憎たらしさにデコピンをかましそうになるほど、それは見事なドヤ顔だった。

「鈴……さん……？」

「どしたの？ ウリ坊ちゃん」

そのあまりの豹変ぶりに、セシリアとエリーもちよつと引きながら鈴に疑問の声をかけた。それに対し鈴は嬉しくて嬉しくて仕方が無いといわんばかりに口元はにやけ、体をくねらせながら、事の仔細を語り始めた。

「えゝだつてゝ、箒も一夏も素直じゃないわけよ。そんな二人だから馬鹿正直に「鈴の勝ちに賭ける」とか言えなくて、それで悩んだ挙句にセシリアに賭けたのよゝ、即断即決しがちなこいつらがあれだけ沈黙してたのがその証拠よっ」

そう言い切ったと同時に、鈴の額に二つの指が伸びる。

「――」
「――」

その指の持ち主、一夏と箒は無言で中指を折り曲げ、その先端を親指で抑えた。見紛うことなきデコピンの形だ。

ギリギリと、傍から見てるだけでも全力全霊の力が込められているのがわかる指は、直後、未だご満悦の表情を晒している鈴の額に強烈な音を立てて激突した。

「ふっふん———ぶめぎゃっ!?!」

まあ、何処からどう見ても鈴に内心を暴露された一夏と箒の照れ隠しでしかなかった。むしろそれ以外にどうやったら見えるんだと言いたくなるほどの、完全無欠の照れ隠しだった。

「アハハハハッ!! おっ、おなかが限界ですわっ!!」

「プハハハハッ!! もう最高っ、あなた達最高過ぎるわっ!!」

そんなものを見せられては、セシリアとエリーが何々大笑するのも当然だ。

「何? アンタたち恥ずかし———むぎゅ!?!」

それを見て調子に乗った鈴の口を、一夏と箒の指がつまんで広げて封じたのだった。

ちなみに翌日、朝のSHRにて生徒会から配布されたプリントがあった。

『学内大会における応援旗の仕様とその規定』

ああそう言えばエリーって生徒会長だったわよね、そうか……あの言葉本気だったんだ……。

「——ふっざっけんなあああああっ！！ エリーの馬鹿あああああっ……！」

朝も早くから、一年二組の教室に鈴の絶叫が響き渡ったのだった。

第五話（後書き）

<あとがき>

何というか、話における鈴のヒロイン度がヤバイ。セシリアにまでいじられるって……。

きっと「うがっっ!」と吠える鈴を見てIS学園の生徒たちは次々と陥落しているでしょう。……新ジャンルがポなんてありだろつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569z/>

Dies irae × I S

2011年12月26日21時45分発行